

五島列島・椀島のカクレキリシタン御帳箱

——大小瀬末福文書の分析を通して——

佐藤 智敬

目次

はじめに

一、カクレキリシタン研究略史 —キリスト教か否か—

二、椀島・大小瀬末福家について

三、大小瀬末福家の御帳箱

四、点在集落の民俗と帳に対する観念

(一) 人生儀礼

(二) 年中行事

(三) 船魂

(四) 神社信仰

五、モノとしての御帳箱

おわりに

付録一 大小瀬末福氏所有御帳

付録二 古野清人「隠れキリシタン」(一九五九年

至文堂)より「椀島」抜書

はじめに

五島列島・椀島(かぶしま)(旧称椀島)という過疎の島には、漁村部の地下集落(じげ)と、半農半漁の、点在集落と呼ばれる複数の小集落がある。そのうち、点在集落は行政上、「連合区」と称され、また通例、新興開拓地を意味するヒラキ、あるいは居付(いっふ)とも呼ばれていた。そして近

世後期、大村藩から送られた開拓移民より続く潜伏キリシタンの末裔とされている^①。

筆者は平成十年（一九九八）年から、枕島において民俗調査を続けている。そしてその過程で、もはや戸数が少なくなっている点在集落の歴史をまとめ、その性格を分析したことがある^②。そこから見えてきたものは、島内で移住、分家をくりかえし、地下集落との関係を保持しつつ、キリスト教に起因する信仰を近年まで持ち伝えていた五島列島の集落の姿であった。

筆者が調査をはじめたときにはすでに、枕島のキリシタン組織（帳内^③）は解散していた。しかし何軒かの家においては未だにキリシタンの信仰を保持し続けていることが伺えた。しかし、そうした人びとは、点在集落の中でもいまや少数派で、難しい信仰をわざわざ続けている特異な人たちという印象を持たれていた。彼らのかつての信仰はそれだけ伝承困難で、極秘のものであったようである。また、信仰を保持している人にとつては、その内容自体は未だに秘匿すべきものであり、その内容を簡単に教えてくれる方は少なかつた。

しかしながら、その信仰内容の細目こそなかなか把握困難であったが、島での生活の変遷やキリシタン以外の行事や、解散以前の苦勞話などを聞くことはできた。そこから、かつての彼らが決してカトリックのみの影響を受けて暮らしていたわけではなく、さまざまに宗教を複合させた信仰を保持していたことを改めて知った。

平成十四年（二〇〇二）、一人の潜伏時代からの信仰を続けていた点在集落在住の方が逝去された。名を大^{おほ}小瀬末福氏^{こせまふか}という。その後、彼が保持していた信仰の道具類（御帳箱^④）の一部は隣島の福江島にて保管されることとなり、内容が一部明らかとなった。本稿ではその方からの調査成果と御帳箱に保管されていた文書を手がかりとして、彼らの信仰の複合性および信仰対象としての御帳箱の特徴について改めて考えてみたい。

一、カクレキリシタン研究略史

—キリスト教か否か—

現在、「キリシタン」という言葉には、多くの意味が込められている。たとえば「キリシタンの島」という時には現在カトリックに属している現行のキリスト教徒を指す。「キリシタン時代」となればキリスト教伝来時代を指す。たとえ「隠れキリシタン」としても、近世の迫害・潜伏期、近代の復活などの様々な時期によって個々の意味を持つている。研究者間でも、カトリック信者を含め「隠れキリシタン」「旧切支丹」等様々な表記があり、混乱が生じている。そこで本節ではまず、宗教学者・宮崎賢太郎の提示した概念をもとに、筆者の問題とする「カクレキリシタン」研究について振り返ってみたい。

近世、禁教政策の中、隠れてキリスト教を信仰し続けた人々を「潜伏キリシタン」と呼ぶ。近代以降、キリシタンであったことを公表し、カトリック信者になった人々を「復活キリシタン」と呼ぶ。それに対して、教会に属すことを嫌い、仏教や神道、民間信仰と融合

した禁教時代の信仰生活を続け、信仰を続ける人々を「カクレキリシタン」と分類している。しかし跡継ぎ問題などからカクレキリシタンは急速にその数が減っている。

潜伏キリシタンの末裔は、多くの場合禁教時代以来祈りの言葉（オラツシヨ^⑤）を記したものや、キリスト教の祭日を知るための暦（バスチヤンの日繰^{ひぐり}）を伝えていた。それは生月、外海、五島など長崎県を中心とした九州地方に多く残っている^⑥。

キリスト教の伝来時代の信仰やキリシタン大名についての研究、真偽は別としてもマリヤ観音やキリシタン墓碑、禁教時代の潜伏キリシタンたちについての歴史学的な研究は非常に多いが、近代以降の彼らについての分析はそれほど多くない。

これまでカクレキリシタン研究において、祈りの言葉や暦の分析は、主に宗教学の立場から行なわれてきた。それはオラシヨがどのような意味を持つのかを言語論的に追求、あるいは暦の解説を行なうといったものだった^⑦。

とくに五島列島においては、奈留島在住であった道

脇増太郎によつて戦後すぐに公表されたオラシヨが田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』において研究され、さらに片岡弥吉らによつて『日本庶民生活史料集成』二十一に採録され、広く一般の人々の目に入りやすくなつてゐる。

高崎恵によれば、カクレキリシタン研究史は、これまで、次の三つの研究方法がとられていたといふ³⁾。

1 カクレキリシタンの宗教的行為、信仰内容を記述分析する民俗学的立場

2 宗教を共有し、隠匿する社会集団の凝集力、統合形態を宗教社会学的に論ずる

3 『天地始之事』などの文献より宗教学の立場からカクレキリシタンの宗教世界の分析を目指す

いずれにしても、これまでの多くの研究成果は、「キリシタン」という名称からか、いかに彼らがカトリックの信仰を伝えているか、あるいは本道であるかトリックがいかに変容したものであるかを分析している。それ以外の部分はあまり注目されていなかつたよ

うに思われる。もちろん、カクレキリシタンという概念が近年まで規定されていなかつたことを考えれば当然のことかもしれない。

たとえば、長崎県下のカクレキリシタンに総合的に調査検討を加えた宗教学者・田北耕也は、彼らがカトリックの影響に加えて、寺社の信仰をも保持している点について、次のように述べている。

祭礼はキリシタンたちが我流にやるのであり、ただ神社という名を借用しただけである。仏寺との関係が年貢の上納を要することと比較して、神社関係には負担がない。宣教師の墓や、殉教の遺跡などを、そのまま放任するに忍びないので、今なら公然と記念碑を建てべき所に、こつそり祠を建てたのだらう。そこにはカモフラージュの気持ちはもたらしていたのであらう⁴⁾。

おなじく宗教学者の片岡弥吉は次のように述べ、彼らの信仰の中心はあくまでもキリスト教(カトリック)にあるとしている。

習合を教義の折衷乃至垂迹の意味に解するなら、この考え方にはなお疑問がある。寺社との関係、神仏行事など、多分に仏教、神道さらには祈祷まじない、土俗信仰などの風習と思想とが入りこんではいるけれども、御親ゼウスと御身ゼウスへの信仰が中心であり、御母サンタ・マリアへの思慕を失わないキリシタンの思想が中核になっている¹⁰⁾。

さらに片岡は、潜伏時代にはほぼ正確に伝承されていた(とされる)カクレキリシタンのつたえているオラッショが、近代以降になつてから、さまざまな形に転訛している点について次のように述べ、信教の自由の獲得後も復活キリシタンになることを拒否する点に否定的な見解を示している。

信教の自由の社会でなお、秘匿的宗教形態を維持し、宣教師がいるのに、その指導を拒否するといふ、異常な宗教性からくる変貌と思われる¹¹⁾。

こうした視点が分析の中心であった中、宮崎賢太郎

はカクレキリシタンがカトリックの末裔に相当するといふ従来の説に疑問を投げかけ次のように述べている。

二五〇年あまりにわたり江戸幕府の弾圧をこうむり、また明治以降一〇〇年以上の時を経て、カトリック的特質を消失し、きわめて日本的な民俗宗教のひとつとして変容している¹²⁾。

紙谷威廣は宮崎の著作に対する書評の中で、その成果を肯定しながら、カトリックからの変容を問題にするのではない視点を次のように述べている。

村落組織としてのカクレキリシタンはどのような位置を占めていたのであるうか。(中略) ムラにおけるさまざまなネットワークのなかでのカクレキリシタンの信仰組織が明らかにされたときには、キリスト教によつてもたらされた日本社会の変化の実態が浮き彫りにされるであろう¹³⁾。

このように、隠れキリシタンについての代表的な研究は、日本におけるキリスト教の受容と変容に焦点をあてた研究が多く、それ以外のものは仏教、神道、民間信仰といかに混ざり合っているか、そしてその世界観はどのようなものであったのか、といった点が主要な問題意識であったと思われる。

紙谷も指摘するように、キリスト教はその伝来年代が仏教よりもはるかに新しい外来宗教である。ゆえにことさら古いものを求める傾向にあった民俗学では問題にされにくかった。さらにその影響が強く残る長崎県では、近代よりも伝来から弾圧時代に問題関心が集中していたと考えるよいだろう。

民俗学においては片岡のいう「異常な宗教性」にも関心を持ち、分析を続けるべきであった。しかし調査対象地である長崎県下の民俗研究においては、老岐・対馬がおおいに注目され、調査困難な山間部に多く、キリシタン習俗が多く残っていた長崎、外海、平戸、生月、五島などの調査が充分に行なわれたとは言い難かった¹⁴⁾。

その中で、民俗学の立場から長崎、東楡山の隠れキ

リシタンを調査分析した土井卓治はその論考で、「かくれ切支丹故にある民俗」、「かくれ切支丹にも拘わらずある民俗」といった節をもうけ、カトリックの影響とそれ以外の民俗を分類し、考えていく必要性を説いている。そしてその信仰について次のような見解を出している。

東楡山の現行民俗を一々吟味して、それがカトリックと直結のものかどうかを決定することは、現段階では困難というほかない。(中略) かくれ切支丹の民俗の中にも日本的な固有民俗の残存・変形があると考えた方が妥当な場合もあるのではないかと¹⁵⁾。

何をもって固有信仰とするかといった点を除いても、キリスト教の影響のみならず、さまざまな民俗信仰との複合に注目すべきという視点を提供していると考えるだろう。

実際、カクレキリシタンの習俗に限らず、法の影響、神葬祭や神社信仰、託宣などにより、近代以降に発生

したものは全国各所が多い。そしてさまざまなもの
の混成に新旧をつけることは困難であることも間違いない
であろう。

カクレキリシタン研究史上、五島列島については、
福江島や奈留島、中通島などのそれが浦川和三郎⁽¹⁹⁾、
前述の片岡弥吉、田北耕也らによっていち早く明らか
になっていった。しかしながら枕島(樺島)のキリシタ
ン関係の資料は、金川義人⁽²⁰⁾や、川上弥久美⁽²¹⁾、古
野清人⁽²²⁾、山階芳正⁽²³⁾らによる断片的な成果こそあ
れ、オラツシヨの存在やその信仰の詳細が再発見され
ることがなかった。

かつて、枕島の点在集落の人々はほとんど潜伏キリ
シタンの子孫で、カクレキリシタンの組織に属してい
た。彼らは他宗の間には神道祭とか仏教などとい
つつ、潜伏時代の流れをくむ信仰を伝承していた。そ
の内容は点在集落内部で極秘に伝承されていたよう
で、儀式中、他宗の人間に内容を知られないように見
張りに立った経験者もいる。それゆえ、地下と呼ばれ
る他宗の人々には、「いきあたりばったり」「順応する」
といった意味を持つ「ソコソコ宗」の信者と考えられ

ていた時期もあった。

組織としてのキリシタン集落はもはや崩壊してお
り、その意味では枕島の点在集落はカクレキリシタン
集落ではない。しかし、人生儀礼や一部の年中行事を
司る組織が失われた点を除けば、彼らの生活に大きな
変化はない。個人の生活に注目するなら、いくつもの
信仰と習合した潜伏時代の信仰は多く残っている。

カクレキリシタンの組織は、オラツシヨや日繰りを
記した帳面や葬儀に使用する布などを木箱に入れそれ
らを「御帳」「御帳箱」として保管していた。筆者は
これまでの蓄積に加えて、カクレキリシタンの祭具と
して伝えられた祭具(御帳箱)が土地の人々にとって
どのような意味を持ち、またその内容がいかにキリス
ト教の解釈のみではなく、地元の伝承や信仰とも不可
分であるかを改めて明らかにしてみたい。

具体的には五島列島、枕島・大小瀬集落(おおこせ
ではない。地籍上は浦の浜という小字に属するが本人
たちは大小瀬集落の住人と考えている)の大小瀬末福
氏(大正十二年九月十九日生まれ)の所有であった御
帳箱の分析を通して、枕島におけるカクレキリシタン

を捉えなおしてみたい。大小瀬氏は、カトリックにおける神父役に相当するとされる「帳方」(大将ドンとも呼ばれていた)を務めたことがある。そして島のキリシタン組織が解散してからも個人でその信仰を続けていた人物である。枕島の潜伏キリシタンの末裔としてもっとも保守的な信仰を続けた人であり、その意味では一般的な点在集落の住人とはいえない点は注意が必要である。

二、枕島・大小瀬末福家について

枕島の点在集落に限らず、五島列島のキリシタンの人々の大半は四、五代前に他所から移り住んできたこと伝えられている。大村藩から潜伏キリシタンが五島列島に集団移住したとされるのが寛政年間であるというから、その子孫の一部が枕島に移り住んだものである。大小瀬家もその例と考えられる。初代とされる久蔵から福太郎―林太郎―末福と、四代続いている。姓は明治になってから地名を参考にしたと考えられる²⁾が、樺島に移ってくる以前から大小瀬を名乗っていた

という伝承もある。

生業として稲作、畑作とともに漁業も営んでいた²²⁾。妻の父親も帳方をしており、色々な事柄を父親から聞いていた。大小瀬家が特別帳方を務めてきた家ということではなく、鍛冶梁、平山、隠崎、竹浦など、多くの点在集落の人びとのなかの一軒にすぎない。

末福氏は、かつてこの土地で一反ほどの田畑をつくって耕作していた。大小瀬集落には十四軒ほどの民家があったが現在一軒のみである。販売用の作物もつくっていたが、最近は自分達がたべるためのイモ、牛蒡などを作っている²³⁾。枕島内で最後まで稲作を続けていた家でもあるという。

末福氏は成人後、軍に入隊し、久留米に一年、満州に一年、台湾に一年勤め、やがて病気になり終戦頃に結婚。八人の子をもうけた。現在子供たちは愛知、大阪、福江、奈留などに転出しているという。

近年、大小瀬集落は大小瀬家たった一軒のみになつてしまったので、他出している子供たちを頼り、自分達も島外に出て行こうかとも考えたのだが、軍隊時代から病気を患い、また経済的な理由もあり、この土地

で暮らした方が食には苦勞しないのでこのまま住み続けることにしたのだという。

筆者がはじめて大小瀬家を訪れたのは、成城大学民俗学研究所で行なわれた研究プロジェクトの一年目に、柗島を訪れた平成十年（一九九八）八月四日のことであつた。島の昔からのことを詳しくご存知の方が、港から遠く離れた山中に、たった一軒のみで暮らしているという話を聞き、家に伺つたのがきっかけである。しかし、自分達が本人たちのいう「旧キリスト」の宗教²⁵を保持していることは、しばらく話題に上らず、我々も家の歴史、生業の変化などを聞いていた。話を始めて一、二時間たつまで、信仰に関する話はまったく出てこず、家の間取りについて聞いていて、仏壇の話に及んだ際、「ここではホトケサマという」という話をきっかけにして、宗教の違い、カクレキリシタン²⁶についての話となつたのである。

お伺いした八月四日も、ある「神様の命日」であり、お祭りをしていたのだという。その神様の名を尋ねると、ニツと笑いながら「忘れた」とおっしゃっていたのを印象深く覚えていた²⁷。

その後筆者は大小瀬家に何度か宿泊を許され、現在に至るまで柗島の点在集落の調査を行なう拠点の一つとさせていただくことができた。しかしながら、漁や神社のこと、本人のライフヒストリー、島の生活の変化等は詳細であつても、自分の信仰に関することについてはなかなか話をしてくれることがなかつた。それには末福氏が帳方時代のある経験が大きく影響しているようであつた。

末福氏の帳方時代、点在集落の人々が減っていくこともあり、秘密にしておこうと考えていた宗教について公にしようと考えたこともあつた。しかし、島の郷土研究家が、何度も祭りの写真を撮ろうとしたが、結局何も写らなかつたという。そのくらい神様も公になることを嫌がつているのだらうと思ひ、内容を外部の人々に伝えることをやめたのだという。

当時伊福貴の山ノ神祭りを取材、撮影した郷土研究家・川上弥久美氏によれば当時カメラの調子が悪く、一部の画像が鮮明に現像されなかつたという²⁸。しかし、事実がどうあれ、その詳細を誰にも明らかにすることがなく、筆者にも時折その断片を示唆してくれ

るのみであった。枕島に住み、過去帳方をつとめ、外部に多くの情報を提供してくれたという、長刀休次郎氏や浦本金松氏（いずれも故人）などとは異なり、かなり保守的な人物であったようである。

三、大小瀬家末福家の御帳箱

昭和五十六年（一九八一）、枕島の点在集落のうち、大小瀬集落を含む伊福貴町に属する点在集落のカクレキリシタン組織が解散した。その結果、それまで祭祀に使用してきた帳、布などは、福江島の堂崎天主堂に復活の日まで預けられることになった。その時の様子は、堂崎天主堂を管理する浦頭教会の記録から推測することができる（註）。

次の引用は、枕島・伊福貴町のキリシタン組織が解散し、その道具を預けた際、浦頭教会により作成された覚書である（本文書はB五版横書き。表記の都合上、一部筆者により修正を加えている）。

●枕島古キリシタン お帳預かり覚書

昭和五十六年九月十四日

枕島元帳代表者、浦頭教会野下千年主任司祭を訪問する。

福江市本窯町 松本吉男

伊福貴町 平山亀夫

伊福貴町 浦本庫一

伊福貴町 串田 豊

我々の先祖から伝わった元帳（かくれキリシタンのふるさと枕島は時代の変わりとともに若者は都会で生活している。島に住む者は高齢化し、又親も子供から呼ばれ都会へと年々世帯、人口も減少し、過疎化が進み、現在では後継ぎもいなくなった。

枕島には 一、隠崎（二戸四人）、二、平山（三戸八人）、三、永田（二戸四人）、四、芦ノ浦（一戸）、五、竹ノ浦（二戸）のクルワがあったが、十三年前（昭和四十六年）に合併、六十檀家となった。

帳役 長刀休次郎（七十四）（前代 大小瀬末福）

水方 浦本庫一（五十三）（前代 平山岩夫 五十八）

下役 欠

であったが前述の実情である。

そこで我々が守ってきたクルワを預けにきた。何年後に復活できるかわからないが、堂崎キリシタン資料館にでも保管してもらいたい旨である。

持参したクルワ（お帳箱）

隠崎クルワ（南河原方面から渡っている）

平山クルワ（若松の滝が原から渡っている）

永田クルワ（大村という説もあるが分からない）

以上野下主任司祭へ懇願する元帳代表者との対話の概況を記す。

赤尾俊重

椛島のクルワ

洗礼を受ける場合

十字をきりながら

男には「さんの」 女には「さんた」

祈り

「よこてばあうる はずものめばあてるえつにり

ゆうえつすべりといのめとさんじえさあんじ」

アーメン

ヨハネ五島（聖五島ジュワン）に関する言い伝え

◎ 椛島の隠れキリシタンの間で秘かに言い伝えられていること

浦本金松氏（現芦ノ浦帳方）

「二十六聖人の一人が芦ノ浦を出発した」川辺テ

ヤさん達から伝え聞いた

長刀休次郎氏（元前海帳方）

「ジュワン五島は芦ノ浦出身」長刀永一郎氏から

聞いた

平山岩吉氏（元焼山帳方）

「ジュワン五島は焼山生まれ」

以上、簡単な文書であるが、組織の維持が困難になり、島内に複数あった組織が合併してもなお、後継者不足に悩まされ、ついに解散にいたる経緯や、実際にどのような祭祀をしていたかをうかがうことができる

貴重な資料である。

この文書にある解散のことを、末福氏はよく覚えていた。その際、他家が神道や仏教に改宗するなか、自身が保持していた御帳箱と一緒に納めず、自家にてその信仰をそのまま続ける道を選んだのである。筆者が「道具を預けてしまったのにどうやってオラツシヨや祭日を覚えていいのか」と質問したところ、「自分のぶんは写し取って保存してある」と言われ、神棚に供えてある木箱を見つめていた。しかしながらその内部についてご教示されることは、何年間訪問してもほとんどなかった。しかし「その内容は万葉仮名のようなもので、知らなければ読めない」、「書いてあることは本当に信仰するものでなければ教えられない」、「それだけを解読しても書いていないことを唱えることもあるし、また、唱えるといつても声を発せずに唱えることの方が多し」といった事柄をくりかえし語っておられた。

実際、堂崎に納められた永田や隠崎の帳の中には、近世期のもと思われるものがある。記述もたしかに万葉仮名の様なもので、一般人には読みづらい。そし

てオラツシヨはその跡継ぎにだけ伝えられるもので他の人に伝えてしまったらその人に悪いことがおきると信じていた。

オラツシヨや行事について、かつては多くの詳しい人がいたのだがもう亡くなってしまっている。一九九八年に亡くなった、若ノ浦の元帳方・浦本金松氏も色々知っていたのだが全ては聞いていない。水方や下役をやった人はまだいるが帳方の役については詳しく知らない。末福氏自身も死者を送るときのオラツシヨを二つ習えなかったという。詳しいとされる他の元帳方に関してもいくらか間違ったものがあるように思うということであった。

祭祀方法やオラツシヨなどの詳細は、役職に就いたもののみが口承で伝承される。オラツシヨも唱える場合と帳方が声に出さず唱える場合が多かった。ゆえに女性や子供、その他の構成員にとってその内容は地下集落におけるお経と同等のものであったようだ。

昭和二十二年（一九四七）生まれの点在集落出身の女性は、子供の誕生、葬礼の際両親や祖父母が何事か行っているのを見て地下とは違う宗教だ、という程度

にしか分からず、オラシヨも習わないままに鳥を出たという⁽²⁸⁾。母方がカクレキリシタン集落の出身である川上弥久美氏によれば、自分の母の実家の仏壇がクリスマス前後になるときれいに飾られることを不思議に思い、また宗派を聞いても教えてもらえなかった経験があるという⁽²⁹⁾。このように、たとえ点在集落内部であってもその内容は限られた人のみのものであったのである。

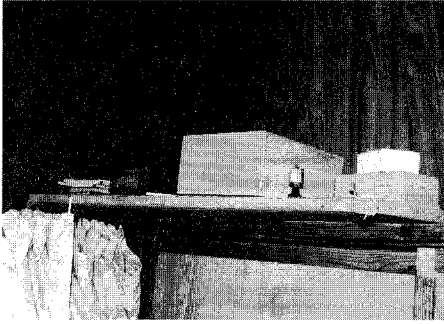


写真1 大小瀬家神棚に祀られていた当時の御帳箱
2003年10月、筆者撮影

末福氏は、平成十四年(二〇〇二)、数ヶ月の入院を経て福江島で亡くなられ、葬儀は大小瀬集落において仏式で行われた⁽³⁰⁾。その際、自分が持ち伝えてきた御帳箱を墓と一緒に入れさせ、自己一代でその信仰を絶やそうと考

えていたようである。実際、ほかの島で帳方をやめたり、帳を組織できなくなった場合、最後の帳方と共に墓に入れたり、焼却処分してしまうことはよくあることである。しかし、伊福貴の永田、平山、隠崎の三帳が解散(実際はすでにこれらの帳は合併し、一組織になっていた)し、持ち伝えた道具を隣島福江島の堂崎天主堂に預けたことがあることから、末福氏の遺族は、「同じ神様がいるところに置けば寂しくなろう」という意向から、末福氏の没後百日を以って堂崎天主堂にその御帳箱を預けることになったのである。

堂崎天主堂に納められたのは、①「昭和五十一年吉日 見本帳」②「昭和五十一年吉日 見本帳」③「日繰り帳」④「昭和五十一年 吉日 御一年内見本帳」と題されたものおよび祭祀用の布である。①は潜伏キリシタンが祭祀に使用する聖人(神様)の名を記した帳面である。②はおもに人生儀礼を行なう方法を記したものとされる。④は、③の日繰り帳の使用方法およびそれぞれの行事の行い方を解説したものである。つまり、オラシヨ以外の祭祀方法を末福氏が解釈を加えたものが納められたということになる。

末福氏は自分が帳方時代の昭和五十年代、様々な記録を受け継ぎ、筆写するにとどまらず、その祭祀の次第を自分なりに解釈して文書を作成していたと思われる。寛永十一年（一六三四）の旧暦をもとに作成されたとされる、いわゆる「バスチヤンの日繰り帳」という教会暦は、そのままではなく、寛永十一年の旧暦を毎年の新暦に換算せねば使用できない。日繰り帳を末福氏なりに換算し、その日に行なうべき行事を記したのが④である⑤。

四、点在集落の民俗と帳に対する観念

本節では、筆者の調査成果およびそれについての御帳箱に記された解説を通して、在りし日の枕島のカクレキリシタンの信仰生活の一端を復元してみたい。彼らの特徴は、誕生から名付けを経、葬送まで続く人生儀礼と、独特な年中行事に代表される。また、カトリックの影響とは別に、生成したと思われる信仰も見る事ができる。

(一) 人生儀礼

名付け 枕島内でも、芦ノ浦等ほかの集落ではキリシタンの祭祀の行ない方は多少異なり、末福氏によれば三通りあるという。また細かな祭祀の日の設定も少し違っているらしい。洗礼するときは洗礼する人の御名（オナ）をもらう。その名付けをする人がボンサマ⑥。洗礼をする時も、祭りを行なうのもすべて唱えることは暗唱する。現在のキリスト教（カトリック）はみんな書物を見て色々なことを言うので、こちら（カクレキリシタン）の方が難しい、という。

末福氏はドミゴス、妻のトミさんはドミガスという洗礼名を持つ。それらに限らず、洗礼名は何通りもある。その名は抱き親役の洗礼名をつけるのであって、じゅんぐりにめぐっていく。

洗礼名をつけるときは生まれて一週間以内に名付けている。その儀式は他宗の人に分からない様に朝早く行っていたという。末福氏は自分の八人の子供に洗礼をしたが、それ以降、子供がいないので数十年名付けは行なっていないかった。

その洗礼名を持つ点在集落の人びとはまだいる。な

お、子供達は全て他所に転出してそれぞれ生活しているが、カクレキリシタンの儀礼を受け継いでいる子供はいないという。娘さんが一人、クリスチャンと結婚したが、その時は自分達の間での洗札名をクリスチャン用にしたものをそのまま使うことができたという。

葬制 転出した家の墓も今でもあるが、基本的に土葬。墓石を作ることもなかった。近年大小瀬家の墓を建立した。しかし、当の末福氏に戒名がつけられるまで、本人の名だけで戒名ないし洗札名は載っていないかった。

彼らは葬送時、神式、仏式による仮の葬儀をあげ、その後にかくれキリシタン式の葬式を行っていた。位牌を神主や僧に書いてもらっても、その裏面や下底に洗札名をまるで隠すように記し、仏壇に供え三十三年の年忌が明けるまで先祖供養を行っていた。

(二) 年中行事

正月、盆には煮しめや供え物をホトケさんにあげる。末福氏がとなえるお経はちゃんとしたオラッショであった。奥さんの場合は「あがってください」と言っ

た。本来のものは、難しいといった印象があるようだ。

ホトケサマとしてまつる先祖はお盆にまつる。その時、他宗との差として、スイカをあげることを強調していた。そのほか、ナス、畑の里芋をシヨウロウサマに供える。十五日にはそれらを下ろし、新しく団子、ぼたもち、赤飯、ソウメン等を供える。新しく米を炊いたらば、ホトケサンにあげる。盆にはおはぎをつくったり最後の日はソウメンをあげたりする。墓には灯

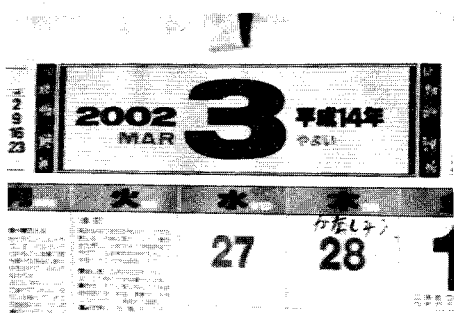


写真2 大小瀬家のカレンダー
2月28日に「かなしみ入」と記している。この年末福氏は逝去されたので、最後の記入である。

2003年3月かなしみ入り中、筆者撮影

明をつけるだけであるという。
また、そうした祭りの際に出すお膳に出す食べ物、その並べ方が難しいのだという。(コンブ、あげ豆腐、里芋(里芋がな

馬鈴薯、カボチャなど)、天ぶら、しらごはん、魚と酒、フ、氷豆腐、水コンニャク、カンテン)などを定まった形でならべ献するのである。

十二月二十三日には、カクレキリシタンのクリスマスに相当する祭りを行なっていた。その祭礼は盛大なものであったが、それ以外にも一ヶ月に一度くらいそれぞれの神様の命日というのがあり色々なものを供えていたという。

原典を「バスチャンの日繰り」とするならば、正確に換算すると、新暦八月五日であるべき「ゆきの三夕まるや様の祝日」は前日の四日(筆者が末福氏と対面した初日こそこの日であった)に、十一月六日(新暦十二月二十四日深夜)の、クリスマスに相当する「御みのなたるせつた(たいや)」は、末福氏の換算ではその前日の二十三日に行なうことになっている。つまりは、一日ずつ換算がずれていることになる。しかし、同じく柗島の点在集落である芦ノ浦集落においても、新暦十二月二十三日にクリスマスに相当する「おたいや」を行っていたことがわかっている。で、柗島のカクレキリシタンは、実際のカトリックの祝日からずれ

た年中行事が行なわれていたということになる。

また、マリア様について次のような伝承が伝わっている。マリア様の子であるオンコヒージュ様は昔追われてマリアさまが馬小屋で生んだ方であり、柗島では馬はいなかったのでオンコヒージュ様の誕生日(オタイヤの時)飼っている牛にご馳走したのだという。伝え聞く伝承として、自分達の先祖は逃げてきたのであって、子供が側にいるときには杖は左をさせ、草履(ワラジ)は逆さにふめ、と言われていたという。その様に歩けば追手は逆行したと思ひ、逃げられるからである。

(三) 船魂

儀式の次第には「舟祝のふりだし」がある。それは漁船に入れる船魂のための祭式を伝えている。地下の人々もまた船大工によつて船魂を入れてもらうことは一般的なことである。復活キリシタンの人びとも、自分達の乗る船には十字架を船魂と見立てて船の安全を祈っていたようである。これはもちろんキリスト教の影響ではなく、日本の民間信仰が影響を与えたものであろう。

大小瀬末福家には、オラツシヨとともに、末福氏が帳方時代に行なつたと思われる、船祝いの記録があつた。残念ながらそれは堂崎天主堂に寄贈されることはなかつたのでその詳細を追うことは困難である。

(四) 神社信仰

梶島の点在集落にはキリシタンとは関係のないと思われる信仰や行事も多く見受けられる。それは大小瀬家においても同様である。まず、伊福貴郷の鎮守とされる八坂神社、蛭子神社の祭礼時には、連合区として参加していたし、神札は家々に飾られている。オラツシヨに記された「おはつをう」とは「御初穂」のことであろうから、用語として神道の影響を受けていることが伺える。また、クリスマスに相当するという「おたいや」もまた、仏教用語である「連夜」からきたものであると思われる。その起源こそ新しいかもしれないが、梶島に限らず、キリシタンの神社崇敬は広く見られることである。そうした信仰をキリスト教信仰の隠れ蓑と見るむきもあるが、筆者が聞き取りをした印象からは、キリシタン信仰とそのほかの信仰との価値

にさほどの差は見られず、それぞれ信仰を続けていたと思われるのである。

鷹ノ巣神社参詣 芦ノ浦に近い、鷹ノ巣崎に位置する、鷹ノ巣神社(鷹巣権現)への参詣をするものもある。ここは、点在集落出身で、真言宗の修行を受けた^{ほうた}法人と呼ばれる宗教者が祭祀している神社であり、点在集落に限らず、地下、島外の人びとが多く参拝に来る神社である。しかし、点在集落出身の方とはいえず、キリシタンにゆかりのある祭式を行なっているわけではない。

山ノ神祭り 日繰りの解説には「おはつをうとしましてヤサカジンジヤシバタサンミギリヤ様のほうにごいつしやうに上申してたのみます」とある。つまり伊福貴の鎮守八坂神社の祭神にシバタサンミギリヤ様というキリシタンの神が鎮座するという解説である。この神の名はすでに川上弥久美により指摘されていた^註が、梶島以外でその名を聞くことは、管見のかぎり無い。伊福貴にはかつて多くの法人が住み、その中には多くの潜伏キリシタンの末裔がいた。あるいは彼ら法人の託宣などが影響を与えているのかもしれない。



写真3 伊福貴(地下集落)の八坂神社左がシバ
タサンミギリヤ様であるという。

1998年旧6月14日の地下の祭礼時、筆者撮影

山⁽³⁵⁾の木を切った。それは当時島では多くのイワシを獲っていて、そのイワシを湯搔く薪として使用するためだった。伊福貴の点在集落ではその薪を売った金で電気をつ



写真4 昭和50年代の山ノ神祭り
左奥の和服の男性が大小瀬末福氏

川上弥久美氏撮影

点在としては一番早く電気がついたのだという。通すときは自分達で金を出し合って電信柱も立てたので早かったのだという。
山ノ神のお祭りは、もとは旧

その祭礼は「帳めんのくり方」によれば、一月十五日における山ノ神祭り、および十二月三十一日(大晦日)にお祭りする神とされている。伝承されてきた日繰りにその神名は存在しないし、八坂神社なる呼称自体、近代以降の呼称である。「一月十五日は帳内じゅうのきがんの日」と解説がある。山ノ神祭りの開始については、以下のような伝承を聞くことが出来た。

枕島に電気が通る前、郷の人がバンダケ(番岳

けた。あるときそのバンダケで木を切っていた人が何かに憑かれたことがあった。山のガツバ(河童)に憑かれたのではないか? そのガツバが家屋敷にしていた木を切ったからでないか? などと言われた。それがひどい騒動となったので、それから山ノ神の命日とし、伊福貴の点在集落の人達で祭るようになった⁽³⁶⁾。

電気は六十年前位、終戦前には通っていたという。

正月十五日、後に新正月十五日に行なっていたお祭り
で、数年前にやめてしまった。連合区の人びとで集つ
て飲んで食べて歌ったものだという。伊福貴の点在に
は山ノ神の祠、石塔も神体も存在せず、帳方の家に集
い、お祭りをしていたのだという。山ノ神は、鳥で林
業をしていた人々の間で祭られていたものであり、伊
福貴の隣、本窯の枕島神社、点在集落の竹ノ浦、芦ノ
浦などには、祠や石塔が現存し、本窯郷では点在集落
ではなく地下の人びとによって現在でも行なわれてい
る行事の一つである。

以上のことから考えると、八坂神社に鎮座するとい
う、シバタサンミギリヤ様および山ノ神祭りは、近代
以降、キリシタンの信仰に新しく加わった行事と考え
ることができる。八坂神社は、地下の人々にとつても
重要な神社であり、旧暦六月に行なわれる祇園祭が有
名である。昭和二十五年（一九五〇）、いわゆる「離島
調査」で枕島（当時は樺島）を訪れた竹田且の調査記
録を見れば、そこで行なわれる祇園祭自体も、明治以
降に盛んになったものであるという²⁸。五島列島の各
所に八坂（祇園）の信仰がみられるようだが、それら

が発達し、著名になると、樺島のキリシタン信仰の
中に混入するのには、さほど時間の差はないように思
われるのである²⁹。

このように、末福氏はキリスト教の儀礼とは必ずし
も考えられない事柄にかんしても解釈を加えているこ
とが分かるのである。それとともに、大小瀬家夫婦の
間では、オラッショを記したものの自体が神聖な神とし
ての意味を持っていた。その記述内容自体の理解がカ
トリックの教義のまま伝承されているわけではない。
箱自体、慶事があれば神酒や団子を供えるような存在
であった。

同じく枕島の芦ノ浦集落における聞き取り調査で
も、たとえ帳方の妻であっても、オラッショこそ暗唱
し、筆写することはあつても、「良か日」「悪か日」を
日繰り帳で算出する際、御帳箱の内部は見えてはいけな
いとされていた。オタイヤや葬儀なども、女性の参加
は基本的に許されず、儀礼の終わった後の直会に参加
が許されていた。オラッショ自体の内容も「お経のよ
うなもの」としその内容を解釈することもなかつ
たようである。すなわち、末福氏の御帳箱は、成立年

代こそ昭和五十年代と新しいが、口承と筆写の歴史を持つ資料であると考えるべきなのである。

ところで、堂崎天主堂には、末福氏が保持していたすべての帳が寄託されたわけではない。筆者は末福氏没後、御帳箱が寄託される直前に、枕島において、一度だけその箱の内部を見せていただくことができた。その時には、寄託された見本帳以外にも、オラッシヨを記した帳面が数冊箱に入っていた。

筆者は、末福氏の生前にオラッシヨの内容を聞くことは叶わず、没後、撮影を許されたのも、短いオラッシヨをまとめた「昭和五十一年三月吉日 オラッシヨ」のみであった。それ以外、撮影を許されなかった「コンチリサンノリヤク」などの長い文書を記した帳面も認められたのであるが、それらは寄贈されなかったようである。奥さんでも判読できる仮名書きの文面であるゆえであろう。

五、モノとしての御帳箱

以上ことから分かることは、点在集落の御帳箱は、

カトリックの教義の影響を受けた記録や宝物を収めるものであると同時に、それ自体が神聖なもの、すなわち神のような存在であったということである。「神様の命日」や「オタイヤ」、さらには山ノ神の祭りなどの祭礼時、特に神体を定めていたわけではなく、帳面自体がその役割を担っていたことからそれは自明のことである。宗教学者の古野清人は仏教や神道および民間信仰が中世カソリシズムと集合した特異な混成教としてその本質を「キリシタニズム」と規定して次のように述べている。

「隠れ」の大多数では、オラシヨ類は意味を解せぬままの神秘的な呪文に似たものとして尊重されているにすぎない。「お経読みお経を知らず」というのが現状である。それを正しく復元してやれば悦んで信仰を燃やしつづけるかも知れないが、そのことが直接に改宗の動機になるとは考え難い²⁸⁾。

つまり、点在集落の多くの人びとにとって御帳箱は潜伏キリシタンの末裔であることの証明であると同時に

に、呪符や経典と同じような存在でもあったとも考えられるのである。

近年、小池淳一が「民俗書誌論」と題し、モノとしての文書がどのような印象を与え、それに対してどのような遇してきたかを分析し、「文字それ自体の意味にとらわれることなく、文字が用いられている儀礼や行事、あるいは文字を含む資料が伝えられてきた環境にも注意を払い、どのような組み合わせがどういったシステムの中で意味を持ち、機能しているのかについてとらえる」⁽⁴⁾という提言をしている。その立場からの分析は、キリスト教文化やキリシタニズムの追求といった立場のみならず、五島列島・枕島における文書資料の扱われ方の一側面を追求することになる。教義の分析ではなく、モノとしての帳について考察しようとするとき、御帳箱および箱内部の帳は、版本や経典、神札など、様々な書物と同等ととらえる必要があるだろう。小池の言葉を借りれば「書物を読むこととそれらを書き写すこと、あるいは所有したり贈答したりすることが、近世以降の社会において一種の宗教現象およびその一環を構成する要素としてとらえるこ

とが可能である」⁽⁵⁾のであり、そのように見ることにより、キリシタン史の枠を超えた分析が可能になるように思われる。

しかしながら、枕島においては、長文の記録を筆写し、持ち伝えていくという行為は、点在集落に顕著な現象である。地下において同様に持ち伝えられているものといえば、本窯集落の祭礼時、宝来丸という船上で曳く際に唄われる「きやり唄」くらいのものである。

樺島神社や蛭子神社、八坂神社などの札、佐賀の祐徳稻荷の札、あるいは大師信仰のための経典が家々に伝えられている点は同様である。

また、他所では、般若心経や光明真言などを筆写あるいは暗唱し、その内容理解にかかわらず伝承されていくということはよくある。これらは、御帳箱と同じような意味を持つように思われる。

信仰関係でなければ、筆者の聞き取りからは、伊福貴町の婦人会の記録、点在集落・竹ノ浦集落の青年団の記録などは、詳しい記録を代々つけていたのであるが焼却してしまったという話を聞いた。その後には

「焼く前にあなたが来れば詳しいことが分かったのに……」という感想を漏らされた経験がある。つまり、
枕島のどのような集落でも文字記録に大きく依存している部分があるということであろう。

すなわち、その本義の把握という視点以外に、文字の書かれたモノの伝承という視点で見たとき、大小瀬家の文書類はキリスト教の受容という問題意識とは別の意味をうかがう手がかりとも考えることができるのである。

おわりに

本稿ではこれまで詳細に考察されることの少なかった、五島列島・枕島のかつてのカクレキリシタン信仰を、残された大小瀬末福氏の御帳箱および聞き取り調査から復元、整理し、さらにカトリックの信仰との差異という従来の視点とは別の視点で分析する可能性を探ったつもりである。

とはいえ多くの有人島のならば五島列島のわずかに島の、それも熱心な信者であった家を分析したにすぎ

ず、それが五島のカクレキリシタンの総体であるとは考えられない。

また、枕島の複数の御帳箱の分析過程で、明らかに昭和期以降に作成されたと思われるロザリオやキリスト像が入っている箱も見られたし、片岡弥吉や金川義人の著作でキリスト教の教義を学習している人々もいた。カトリックになることこそ拒んでも、自分達の信仰にどのような意味があるかを知ろうとした痕跡がうかがえる。それもまた、カクレキリシタンの信仰生活に何らかの変化を与えたと考えられる。キリスト教以外の視点も重要であるが、彼らをキリスト教の影響を抜きにして考察することもまた難しいのである。

今後の課題として、点在集落と地下集落の更なる比較をすることにより、キリシタンであった集落の特性と、そうではない集落との差を知る必要もあるし、復活キリシタンにおける聖書等の扱われ方との差異を考察してみる必要があるだろう。

それとともに、島内外における様々な事象を分析していくことから、五島列島の暮らしの過去と現在を描くことを続けていきたい。

〈付記〉

本稿は日本私立学校振興・共催事業団の平成十年度
学術研究振興資金および成城学園からの研究費助成に
より成城大学民俗学研究所が実施した研究プロジェクト
「沿海諸地域の文化変化の研究 ―柳田國男主導
「海村調査」「離島調査」の追跡調査研究―」（研究代
表者・田中宣一成城大学教授）の成果の一部である
（共同調査者、高桑守史・大東文化大学教授、村田裕
志・成城大学教授）。本稿は「東京の息子」として筆
者を迎えてくださった大小瀬家の方々、そして福江
島・浦頭教会の橋口朝光神父および堂崎天主堂の方々
のご協力のもと完成することができた。深く感謝申し
上げます。本稿の発表は故末福氏の望むところではな
かったかもしれないが、調査の場を与えてくださった
氏への不肖息子なりの恩返しと考えている。

〈註〉

- (1) 「ヒラキ」、「居付」の呼称は五島列島の各所に認めら
れるものでは同様の性格を持つといつてよい。
(2) 拙稿「五島列島・枕島における点在集落の歴史 脱

カクレキリシタン史の視点」〔「常民文化」第二十六号
二〇〇三年〕。

- (3) 竹田且によれば、樺島ではカクレキリシタン組織を
「帳内」と自称し、福江島では「古帳」、久賀島、奈留
島などでは「元帳」と称するという。（竹田且「民俗
慣行としての隠居の研究」一九六四年 未来社 三
七二頁）。しかし、堂崎天主堂の覚書には「クルワ」
と呼び、残念ながら筆者は正確な樺島のキリシタン組
織の呼称を確認することができなかった。そこで本稿
では単に組織として表記するにとどめている。

- (4) 帳面のような紙面や祭具が入った木箱を指す。そも
そもその帳面を中心に神父役の帳方が祭儀を行なつて
いた。

- (5) 本来、「折り」を意味する単語。ポルトガル語で「オ
ラシヨ」といい、五島では「オラツシヨ」「ウラツシ
ヨウ」などと転訛している場合がある。枕島の帳内の
文書を見ると、「ウラツシヨ」という表記も見られる
が、本稿では、筆者の聞き取り時点でよく耳にした
「オラツシヨ」で表記を統一している。

- (6) 長崎県内の分布については、長崎県教育委員会「長
崎県のカクレキリシタン ―長崎県カクレキリシタン
習俗調査事業報告書―」長崎県文化財調査報告書第一
五三集（一九九九年）、宮崎賢太郎「カクレキリシタ

ン オラシヨ—魂の通奏低音」(二〇〇一年 長崎新聞社)などが詳しい。なお、長崎県外について把握しているものは、熊本県の天草諸島の例を除けば、管見の限り見当たらない。

- (7) そうした研究は長崎県の生月島、大村地方、五島列島におけるものが蓄積されている。片岡弥吉「隠れキリシタンのオラシヨ 解題」(『日本庶民生活史料集成』第十八巻 民間宗教 一九七二年 三一書房)、木場田直「御ら津志与」(一九九七年 私家版)などを参照。

- (8) 高崎恵「自己像の選択 —五島カクレキリシタンの集団改宗—」(国際基督教大学比較文化叢書4 一九九九年 国際基督教大学比較文化研究会) 五頁。

- (9) 田北耕也「昭和時代の潜伏キリシタン」(一九五四年 日本学術振興会 一九七八年 国書刊行会より複製) 五三四頁。

- (10) 片岡弥吉「かくれキリシタン —歴史と民俗—」(NHKブックス五六 一九六七年 日本放送出版協会) 二九二頁。

- (11) 前掲片岡弥吉「隠れキリシタンのオラシヨ 解題」 九一六頁。

- (12) 宮崎賢太郎「カクレキリシタンの信仰世界」(一九九六年 東京大学出版会) 三〇頁。

- (13) 紙谷威廣「書評 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』」(『日本民俗学』二二六 一九九八年) 四五頁。

- (14) 前掲紙谷威廣「書評 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』」一三五頁。

- (15) 土井卓治「かくれ切支丹の民俗」(『日本民俗学』二一三 一九五五年 実業之日本社) 五七、五八頁。

- (16) 浦川和二郎「五島キリシタン史」(一九五二年 仙台司教館出版部 一九七三年 国書刊行会より複製) 参照。

- (17) 金川義人「殉教の神秘 キリシタン研究書執筆姿勢へのお願い —私のささやかな抗議と怒り—」第3回長崎旅行記」(一九八五年 出版経済研究所)

- (18) 川上弥久美「五島樺島のかくれキリシタン」(『浜木綿』第三十四号 一九八二年 五島文化協会)

- (19) 古野清人「隠れキリシタン」(一九五九年 至文堂)。
(20) 山階芳正「五島の人文地理」(『五島列島 五島列島』九十九島、平戸島学術調査書 一九五二年 長崎県)

- (21) 佐久間達夫校訂「伊能忠敬測量日記」第五卷 九州第二の二(一九九八年 大空社) には、測量箇所の記事として「ヲコ瀬」があり、近世後期にはすくなくとも地名としての大小瀬は存在したことがわかる。

(22) 平成十年(一九九八)八月四日、大正十二年(一九二二)生まれ当主および大正十三年(一九二四)生まれの夫婦より筆者聞取り。

(23) 漁業や林業を末福氏が行い、農業の大半は奥さんの仕事であった。

(24) カクレキリシタンが宗教であるかは疑問が残るが、本人達は「自分達の宗教は……」と認識していた。

(25) また別の時期にお邪魔したら、「かなしみ入り」の最中で精進潔斎をしていたこともあった。

(26) なお、取材時に録音された末福氏のオラツショは、現在、福江島の五島観光歴史資料館にて資料となっており、来館者は随時聴くことができる。

(27) 堂崎天主堂は現在、キリシタン資料を展示しており、天主堂のある福江島のほか、枕島、奈留島などのカクレキリシタン関係の資料が保管されている。いずれも、解散したり、管理する者がなくなったものについて、関係者が保管を依頼してくる場合が多いという。

(28) 有川マリア「隠れキリシタンよ! 永遠に」(金川義人「殉教の神祕 キリシタン研究書執筆姿勢へのお願い —私のささやかな抗議と怒り— 第3回長崎旅行記」一〇〇〜一〇二頁)。

(29) 川上弥久美「隠れキリシタンへの思い」(金川義人「殉教の神祕 キリシタン研究書執筆姿勢へのお願い

—私のささやかな抗議と怒り— 第3回長崎旅行記) 九二頁。

(30) その際、もはやカクレキリシタン式の葬儀を行なうことはできず、福江島の禪宗寺院より僧を呼んでの葬儀となった。それにくわえ、島内の浄土真宗の僧に読経を頼むなど、最後のカクレキリシタンの帳方としては皮肉なことであった。

(31) 先に納められた永田、平山、隠崎の帳との違いは、葬式に使うとされる布がないことであろう。

(32) ジードンという。枕島では神主のことをジャードンさんといい、それに模したものであろう。

(33) 近代になって石塔が立ち始めるまではイシコジマ(イシコツミ)といったもので単に石を置いただけの墓だった。

(34) 前掲川上弥久美「五島枕島のかくれキリシタン」参照。またその情報は「福江市史」上巻(一九九五年福江市)にも採録されている。

(35) 伊福貴郷の高い山。かつて異国船が来ないか番をしていたゆえについた名という。

(36) 一九九八年十月、伊福貴町、鍛冶梁集落出身者から、筆者による聞き取り。

(37) 竹田旦「長崎県南松浦郡樺島」(『離島生活の研究』一九六六年 集英社 一九七五年 国書刊行会より復

刻) 七五八頁。

(38) 実際、シバタサンミギリヤ様とされる石仏をみると、明治年間の銘があり、すくなくとも祭祀の対象となった神体の造形は近代以降のものであることが確認された。一九九九年、筆者による調査。

(39) 前掲古野清人『隠れキリシタン』二四五―二四六頁。

(40) 小池淳一「民俗書誌論」(須藤健一編『フィールドワークを歩く―文科系研究者の知識と経験』一九九六年 嵯峨野書院) 一一八頁。

(41) 小池淳一「宗教現象としての読書」(『歴史評論』六二九 二〇〇二年) 三三三頁。



写真5 オラッシュヨ見本表紙

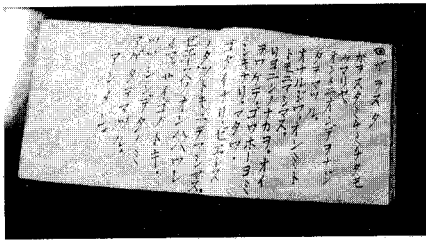


写真6 ガラスタ (オラッシュヨの一つ)

付録一：大小瀬末福氏所有御帳

大小瀬家伝来の資料として、また柗島のカクレキリシタン研究の発展に寄与する意味も込めて、出来る限り文書を活字化し、大小瀬家に伝承されていた文書の全文を掲載しておきたい。

本書は和紙に墨書された数冊からなり、福江島の堂崎天主堂に寄託以前、筆者が柗島で撮影を許され、その後寄託されていない資料、および目にはしたが撮影を許されなかったもので、昭和六十二年(一九八七)に同地から寄贈された文書と大差ないと考えられるものも一部含まれている。

昭和六十二年(一九八七)に寄贈されたものには、さらに多くの文書が存在し、その比較分析をする必要があるが、今回は大小瀬末福氏の信仰対象がいかなるものであったのかを示すものだけに絞った。

各記録の記述方法はそれぞれの表記に従ったものであるが、一部判読し易いように筆者が修正をくわえたものもある。

日繰り帳に関しては記述してある一六三四年当時の陰暦の表記が新暦ではいつに相当し、カトリックの何の祝日にあたるかを含め表にした。

①オラッショ見本帳(堂崎天主堂未寄託)

●昭和五十一年三月吉日

オラッショ

大小瀬末福

○ザツケ

ワレラガリヨウス

サンタクロスノ

オンシルシヲ、モツテ、

ワレラガ、テキヲノガシタモウ。

リヨウス。パーテイ。

リヨウス。ヒイリユウ。

リヨウス。スベリト。

サントヲノ。ミナヲ、

モツテ、アンメン。

○モラシアゲ

オンメリヨウスサマ。

コノセカイニライテワ。

ワタクシホド。カギリモナキ。

キタナキモノワ。

ゴザマセヌ、マタワ。

ステビイコトモ、ゴザイマセヌ。ナレドモ。

オンアルジ、ゼズギリ。

ヒトサマノ、ゴクレキヲ、モツテ。

オンタスケ、クダサレ、

オンメリヨウスサマ。

ツツシンデ、タノミアゲタテマツル、

アンメン

○アベマルヤ

アベマルヤ。カシヤベンナ

ドメンデユーゴ。

ベラットツヨ。イモンヤリヘシ。イキールンナ。

ナールンツ。クローンツ。

デンケエー。レエーヒツ。

ジズサントーマルヤ。

ビルゴーマルヤ。デンデンナ。ラクダンナ。

デエーギノトリーヨ。

ナンキイモナツツラ。

アメン。

◎ ガラスト

ガラスタミチミチタモウマリヤ。

オンメニオンデヲナジタテマツル。

オナルジワ。オンミトトモニマシマス。

リヨニンノナカラ。オイテワケテ。ゴワホーヨミシキナリ。

マタワ。

ゴタイナリ。ゼエースノタットキニテマシマス。

ゼエースノオンハハワレイマ。サイゴノトキ。

ツツシンデタノミアゲタテマツル。

アンメン。

◎ テンニマシマス

テンニマシマス。ワレララガオンヲヤミナタツトーバイミ

ヨイキトイタモウ。

ミツニイキトエタモウ。テンニライテワオボシメシ。

マモナイゴトク。

ジニライテワ。アラシタモウ。

コンニチ。オンヤシナイ。

ワガテントサマニ。ハナスマモナイゴトク。

コンニチヨリ。アクヲノガラセタモウ。

アンーメン。

◎ タスカルミチ

シンデタスカルミチワヒトツナリ。

アケレバフタツ。

クツセバナナツ。

テンピンサンガフネニノル。

ステイソウガサヲサス。

コウベイサンガ、ツナラクル。

バライゾウガミナトニマイル。

イツサツワゴモンニツク。

サンベートロ。サンバプロサマノ。オカゲヲ。モヲシウル

イテ。

アンジクイツテ、アマクダラセタモウ。

ザツソク、イツボンノ。

ヒノヒガリヲモツテ。

アキラカニ、オガミアゲタテマツル。

アンメン。

◎ミチビキ

アルマユクミ。イタルサマダゲヒトツ。ヒキシメ。

ワタツソウナル。ミンツ。

ソレナクコノセカイ。

四十八カシヨノ。オンアルジサマ。

四十八カシヨノオンミレツサマノ。オンチカラヲモツテ。

オントホシクダサレ。

ツツシンデタノミアゲタテマツル。

アンメン。

◎ニドガエシ

リヨウスサマヲ。ハジメトシテ。イツモベルヂンサンタマ

リヤ。サンミギリ。

アルカンヂヨウ。

サンジワンパーウチ。イイズモータツトキ。

サンペートル。サンパブーロウ。

モロノ、ビヤトウヤ。ビヤトウマタウノバイテル。

ココロ。コトバノシワザヲモツテ。

オウクノトガヲ。オサルコト。コレアヤマンナリ。コレフ
カク。アヤマンナリ。コレヲモツテ。サンタマリヤサマニ
タノミアゲタテマツル。アンメン。

◎けれんど

ばんじかなえ玉ー。

てんちをつくらせ玉ー。

おんをや。リョーをさま。

その。おんひとりこの。

われら。おんあるじ。

ぜづあ。せずぎりひと。

すべりと。さんとをすの。

ごきとくをもつて。

やどらせ玉ー。

びるじんさんたまるやさまより。おんうまれいださせ玉ー。

ほんしあーを。べウろーのしたにをゐてわ。かしくをう

け。くろうすにかかりし玉ー。

いしのみかんにをさめられ玉ー。

だいなそこにくだらせ玉ー。

それより。さんにちめにわ。よみがやらせ玉ー。

てんにあがらせ玉一

おんあるじわ。おんみぎにそなわらせ玉一。

これからわ。いきたるひと。ししたるひと。おんたす

けただしたもわんがために。あまくだらせ玉一。

すべりとさんとすのかたをりかねたまします。

さんたいきりんじやうの。さんとをすの。

こもりを。おとがを。

おんゆるしを。にくしんによみがやらせ玉一。

ごあんなき。おんいのちを。まことに。

しんじたてまつる。

あーめーん。

◎あねすてさま

あねすてさまのくれきのしだいごだいののはつばほるはの

こんすたんちのほうとゆうところのくれき。

このくれきおんくれきものはよにかかつてのくれき。

こつてとなをつけたてまつれば。

おんちのくれきのことわれとはおうまのだから。

おんところあうわせたてまつるなうばりかづちなうばおう

かぜけけ。

りようごごとにもだいでするところ。

ないくれきこめとむんなり。

みつにはあつかぜいきれいとんせそのほかいかなるうつる

やしきやまいにてもだいでするところ

たいぐれきこめを玉んなり

よつにはこのおんくれきをもつておんめれをするなんざん

におよぶ

ああまたごどもにつつがなくまぶウせたもう。

いつつにはてんどのさまだけまたわなんたいてんとさん。

あるまいろめんてきよりなすところのぼんの。

しゆうきようのガしたもう

むつに。もののしたじとして。はつばさまをとなえたもう。

おんよんものもつて。

あきらかにあらわれもんなり

あけてかすをべからずとこれちつしようひいりつなりげん

けいはごころあるひとびとのこをみしるごとくたしと

しとしてこれなあそのひとのみいれきとはおほしめし。す

みよくばんちよくしらしめすおんうえよりおんあみてござ

ます。りようす

かくのごとくにはからえたまえばきたり五百拾一人のつか

さをもつてすべりようれつのおんゆるしをこうもんなりこ
のがあり
あんめん。

みちのさんとめ様
さんべーとろ様

二人様

② 神名見本帳

● (表紙) 昭和五十一年吉日

見本帳

大小瀬末福

◎ やく祝 六十一やく

おんめりヨー様

おんはゝさんたまるや様

こんにちごとうばん様

おんとつつぎ様

◎ ごくうかひ

おんめ様 一人様

◎ こどものたんじょう

◎ しんとどけ

さんみぎり様

さんばぶろう様

あほうすとろ様

さんじわん様

びやとのさんつつす様

五人様

◎ こどもの四つみ

びやとのさんつつ様

一人様

◎ さんかたしはい

さんたまりやさま

さんたいきれんちや様

さんたいざべりや様

三人様

◎ やたまし入れ

ろうのさんたまりや様

一人様

◎ 船のしはい様

さんたかちりにや様

さんとのさがらべんとう

様

さんペーとろ様

さんのれんそう様

はつばまるいな様

◎ びよきのしはい

さんたまりや様

さがらべんとう様

びやとのさんとうつ様

あねすて様

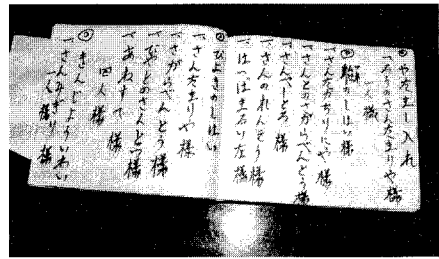


写真7 神名見本帳

四人様

◎ きんじよういわい

さんみぎり様

一人様

◎ つくりこさくのけ

てるな様

るりいな様

あだんな様

からのあかた様

からのあんめりゆうす様

さんぢわん様

メ六人様

◎ かわこんじようしたり

おりべさんとめ様

みちのさんとめ様

さんペーとろ様

まりいな様

さんみぎり様

×五人様

さんぢわん様

◎あまごえのしはい

いつてんでウすひでれす様

おてんび様

てんかいちべとろ様

あねすて様

×四人様

◎りようのしはい

すごろつす様

まごろつす様

さんとくろうす様

三人様

◎みちこんじようしたる

みちのさんとめ様

さんべーとろ様

まりゐな様

◎しんやしきのしはい

ろみちさんとめ様

みちのさんとめ様

さんみぎり様

まりゐな様

あねすて様

さんべーとろ様

六人様

日 どみんご

月 しくた

火 てるしや

水 くわるた

木 きんた

金 せすた

土 さばた

③ 人生儀礼の見本帳

● (表紙) 昭和五十一年吉日

見本帳

大小瀬帳

日 どみご

月 しくた

火 てるしや

水 くわつた

木 きんた

金 せすた

土 さばた

ほん様をつかつたば

あい。

ほん様くずし

ぶつぞうくずし

こんちりさん七かい

でけす

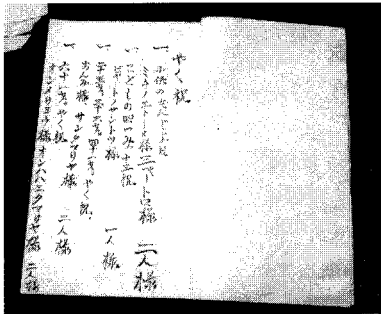
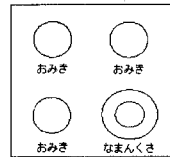


写真 8 人生儀礼の見本帳



やく祝

小供のたんじよ日

ミチノ三ト一様 三ベート口様 二人様

こどもの四つみ 十三祝

ビヤートノサントツ様 一人様

二十五才。三十三才。四十一才。やく祝

おんみ様 サンタマリヤ様 二人様

六十一才。やく祝

オンメリヨウ様 オンハハ三タマリヤ様 二人様

ごくうかい

一、

(1) あだなだれ、あるまなに、どの帳内の、あだな

だれ、あるまなにどの家内のあだな女タの息の。

ごくうかいの。たのみかたの。おみきのおはつをう

ごしまして。

オンメ様のほうにおたのみかたから、ごしやうに

上申してたのみます。ガラスタ(一べんあげる)

(2) あだのみなのごえいこうに。アペーマリヤ三十三ベ

ン オンメ様のほうに上申して。たのみます。

(3) 今日ごとうばん様のほうに。アペーマルヤ十二へんで上げる。

(4) ただ今のおはつを。がらすたいべんでさける

二、

(1) あだなだれだれ(男さんの、女さんた)のほうに。

こんちりさん七十(四十九) かいをもつてごいつしやうに上申してたのむ。

(2) 今日ごとうばん様のほうに。アペーマリヤ 十二べ

ンで上申してたのみます。

しんとどけ。おうぜんわおみきとなまぐさだけ。

三、

(1) あだな末福、あるまどめごすどの帳内のあだ名末

福、あるまどめごすどの家内うちのあだ名だれだ

れ(男さんの、女さんた) なになにどんの。なんよ

う日に(どみごの) あいはてましたるしたい。ろう

まの国の。さんた。いきりんじやうの寺の内にめし

くわいまして。おおさめくださいます用に。

サンミギリ様 サンパプロウス様 アボウストロス

様 サンジワン様 ビヤトノサントツス様のほうに

おとどけからごしやうに上申してたのみます。
ガラスタ 一ペーン

(2) おとどけの、ごえいこうに。アペーマリヤ十二へん

でごあんじやう様のほうにごいつしやうに、上申し
てたのみます。

四、とりをけ

(1) あだなだれだれあるま。なにとんの家内うちのあだ

名だれだれ(男さんの 女さんた) なになにどんの。

とりをけの。おみきのおはつをうとしまして、あだ

名だれだれ(男サンノ 女サンタ) なになにどんの

ほうに上る。 がらすたいペーン。

(2) あだ名だれだれ(男サンノ 女サンタ) なになにど

の。とりをけのごえいこうにアペーマリヤ三十四へ

ーンに。たすかるみち三ペンであだ名。だれだれ男

サンノ 女サンタ) なになにどんのほうに上る

(3) はまえに同じ

五、かけどし

(1) あだ名だれだれあるまなにとんの家内のあだ名だれ

だれさんの。なにどののかげだしのおみきのおはつをうとしまして。あだ名だれだれさん(男ノ 女タ) なになにどののほうに上る。 がらすた 一ペーン。

(2) あだ名だれだれさん(男ノ 女タ) なになにどののかげだし。ごえいこうに。アペーマリヤ三十四ヘーンに。ミチビキ三ペーンであだ名だれだれさん

(男ノ 女タ) なになにどののほうに上る。

(3) 今日ごとうばん様に十二ペーン。

(4) ただいまの。おはつをうを。テンニマシマシーペーンでさげる。

六、ごくうかいのおれい

(1) あだ名末福。あるまどみごすどんの帳内のあだ名。末福あるまどみごすどんの家内のうちのあだ名だれだれさん(男ノ 女タ) なになにどのの?のつみ。

とが。を。ゆるして。くださいました。おとどけの。おみきの。おはつをうとしまして。おんめ様のほうに。 おとどけから。ご一しやうに。上申してたのみます。 ガラスタ一ペーン。

(2) あだ名だれだれさん(男ノ 女タ) なになにどののつみ。とがを。ゆるしてくださりました。ごおんれいに、アペマイヤ。五十三ペーンで。おんめ様の、ほうに。ご一しやうに上申してたのみます。

(3) 今日ごとうばん様のほうにあべまいや十二へんご一しやうに上申してたのみます。

(4) ただ今のおはつをうをテンニマシマシーペーンデサゲル。

一、舟祝のふりだし

(1) あだ名末福あるまどみごすどんの帳内のあだ名だれだれあるまなになにどの、うきだかう。しんぞうせん。なに丸の船祝いの。おみきのおはつをにしまして 三タカチリにヤ様のほうにご一しやうに上申してたのみます がらすた 一ペーン

(2) 船祝のごえいこうに、アペーマイヤ。三十三ペーンサンタカチリナ様のほうに上げる

(3) あだ名だれだれあるまなになにどの、しんぞうせん、なに丸の。たのみち方のおみきのおはつをとしまして、一、サンタカチリニヤ様 二、サントノサガラ

ベントウ様 三、サンペートロ様 四、サンクレン
ソウ様 五、ハツパマルイナ様のほうにごしやう
に上申してたのみます。 がらすた一ペーン

(4) なに丸わだいいだいなん。かなん。あくびようさ
いなんを。一さいのがうせくございます。ごおん
れいにかすのうらつしやうを五十三ペーン 一、サン
タカチリヤ様 二、サントウノサカラベントウ様
三、サンペートロ様 四、サンノレンソウ様 五、
ハツパマルイナ様のほうにごしやうに上申してた
のみます。

(5) 今日ごとうばん様のほうに。アベマイヤナ十二へ
ん上げる。

(6) ただ今のおはつをうをテンニマシマシデ 一ペーン

一、三日めのおみき

(1) あだナ末福あるまじめごすどの帳内のあだ名だれ
だれあるま。なにどんの家内のあだ名だれだれさん
(男ノ 女夕) なにどんの日めのおみきの、おは
つおうとしまして 一、サンミギリ様 二、サンバ

プロウ様 三、アボウストロ様 四、サンジワン

様 五、ビヤトウノサントツス様のほうに、ごいつ
しやうに上申してたのみます。がらすた。一ペー
ん。

(2) おとどけのごえいこうに、かづのうらつしやうを三
十三ペーン。ごあんじやう様のほうに。ごいつしや
うに上申してたのみます。 アベマリヤを三十三
ペーンあげる。

(3) あだ名だれだれさん(男ノ 女夕) なにどんの日
め、おみきのおはつをうとしまして。あだ名だれ
だれさん(男ノ 女夕) なにどんのほうに。ごいつし
やうに上申してたのみます。がらすた一ペーンあげ
る。

(4) あだ名だれだれ、さん(男ノ 女夕) なにどんの日
めのごえいこうに、かづのうらつしやうを、三十
三ペーンに、たすかるみち、一ペーン。くわえて、
あだ名だれだれさん(男ノ 女夕) なにどんのほう
え。ごいつしやうに上申してたのみます。
アベマリヤ三十三ペーン。タスカルミチ一ペーン
あげる

(5) こんにちは、おんとんつぎの、ごとうばん様のほうに

かずのうらつしやうを十二へーン　ごいつしやうに
上申してたのみます　アベマリヤ十二へーン上る。

(6) ただいまのおはつを、ごいつしやうにさげまうして
たのみます。　テンニマシマシ、いつへーんでさ
げる。

◎ つぎわ三日めのあげかたとかわらない

- 一、ひとなんか　一しゆかん
- 二、ふたなんか　二しゆかん
- 三、みなんか　三しゆかん
- 四、よなんか　四しゆかん
- 五、いつなんか　五しゆかん

一、いつなゆかわ、三十五にちのおみきのおはつおうで、
あげる

- 六、むなんか　六しゆかん
 - 七、ななんか　七しゆかん
- なななんかわ四十九にちのおみきのおはつをであげる

一、かたみをくり

(1) あだなだれだれあるまなにどんの家内のあだ名だれ

だれ(しにんのなまえ)さん(男ノ　女タ)なにど
んのほうにあだなだれだれ(カタミオクリヤシテク
レルナマエ)がかたみみをくりのおみきの、おはつ
をうとしまして、ごいつしやうに上申してたのみま
す。　ガラスターへーン。

(2) かたみをくりのごえいこうに。かずのうらつしやう
を三十三へーン。　あだ名だれだれさん(男ノ　女
タ)なにどんのほうにごいつしやうに上申してたの
みます。

(3) こんにち、おんとんつきのごとうばん様のほうにか
ずのうらつしやうを。十二へーン　ごいちしやうに
上申してたのみます。

(4) ただいまのおはつをうをごいつしやうにさげますし
てたのみます　テンニマシマシへーンでさげる
◎ かたみをくりのあげかたが、じきあげとゆう

一、百日め

一年き　一しゆうきともゆう

三年き

七年き

十三年き

十七年き

二十五年き

三十三年き

三十三年き

五十年

三十三年めにわおもちをついてあげる三十三年

三十三年までよい

三十三年でいはいわ、はかにかえす。

④日繰り帳

月	日	新暦	大小瀬末福家(枕島 点在)	印	対応すると思われる カトリックの祝日
二月	小				
	廿六日	3/25	さんたまるや御つけ の日		聖母マリアお告げの 祝日
	廿七日	3/26	ひがん		
	廿七日	3/26	どみご		主日(Domingo)
三月	大		こてたら		
	五日	4/2	どみご さんふらん 志すこ	○	パウラのフランシス コの祝日
	十二日	4/9	らむすのどみご		聖マリア・クレオファ スの祝日
	十四日	4/11			聖レオ教皇証聖者の 祝日
	十九日	4/16	たつくせのどみごさ んうんべと	○	バスクワ・ド・ミイゴ (復活祭) 御復活の大祝日
	廿日	4/17	さんあこせいとは つはの丸じ		聖アニチエト教皇証 聖者の祝日
	廿一日	4/18	さんゑりてりよ	○	聖エレウテリオの祝日
	廿六日	4/23	せ どみご さん志やか		聖ジエオルジオの祝日

			五月									四月
十六日	九日	二日	大	廿四日	十七日	十一日	十日	六日	四日	三日	二日	小
6/11	6/4	5/28		5/21	5/14	5/8	5/7	5/3	5/1	4/30	4/29	
ちんたあでのどみご さんたるなへあすとう	すひゑとさんこのどみご さんけれの丸じくわあ たせこんさんたせこん	どみご んひすば さんぜるま		どみご て丸じ さんはれん	どみご 志よ丸じ さんほろた	さんミける	どみご する ひすはり さんすた二	へん志よ さんたくるすのいん	さんひりえさん志や からへあほすとう	どみご あまところ	さん平とろ	
○	○					○		○	○	○		
聖三位一体の祝日。 聖バルナバ使途	聖霊降臨の祝日	日 聖ゼルマノ司教の祝		者 聖ワレンス司教殉教 の祝日	祝日 聖ポニファシオ殉教 者マインツの司教の 祝日	現の祝日 大天使聖ミカエル出	祝日 聖スタニスラウスの	聖十字架発見の記念日	使途 聖ヒリッポ、聖ヤコボ 使途(アポストロ)の 祝日	聖アマドルの祝日	聖ペトロ殉教者の祝日	

								六月				
廿六日	廿一日	十八日	十五日	十四日	七日	四日	三日	小日	卅日	廿九日	廿三日	廿日
7/21	7/16	7/13	7/10	7/9	7/2	6/29	6/28		6/25	6/24	6/18	6/15
ありい志よこんべそ の日さんた丸いな	どみご よ丸じ さんいじー	五月せつ	せく七人の京だいの 丸じさんたる志い な(祝)	どみご 丸じ さんせんの	どみご やのひすたさん	さん平とろ うろあほすとう さんた	三人のはつばのぜせん		どみご さんげれめん	さんじわんさまち いすめごたんじょー の日	どみご さんまるごす	さんとさからめんと のいわいマエ祝
○			◎		○	○				◎		◎
アレクシオの祝日			女性殉教者フェリーキ タースが7人の息子と ともに殉難した記念日	聖母の訪問	使途ベテロの祝日				証聖者の祝日 聖グリエルモ修院長	洗礼者聖ヨハネの祝日	聖マルコ、サンマルチ エリアノ兄弟の祝日	サンチシモ、サカラ メント(聖体)の祝日

									七月			
十七日	十七日	十六日	十三日	十二日	十一日	七日	六日	一日	大	廿九日	廿八日	廿七日
8/10	8/10	8/9	8/6	8/5	8/4	7/31	7/30	7/25		7/24	7/23	7/22
さんのれんそ	六月せつ	ぜぜん	らんすびくらん日 さんすとはつば	さんたまるや(祝)	どみごすこんへ	さんたいな志よこ ん志	ん丸じ	さんあぶと	さん志やかうへあ ほすところ	せくさんきりすび るせんぜぜん	どみごあほすとる なりなひすほ丸	さんたまるやまた ういな
○			○	◎	○			○		○		○
ローマの殉教者ラウ レンティウスの祝日			吾主の御変容	聖母マリアの雪殿	祝日 聖ドミニコ証聖者の 祝日	イエズス会創立者 イグナチオ・テ・ロ ヨラの祝日	祝日	聖アプトン殉教者の 祝日	聖ヤコブ使途の祝日			マリナの祝日

				閏七月								
十六日	十二日	四日	一日	小	卅日	廿七日	廿六日	廿二日	廿一日	廿日	十九日	十八日
9/8	9/3	8/27	8/24		8/23	8/20	8/19	8/15	8/14	8/13	8/12	8/11
さんたまるやの御い わいあちりあん	どみご	どみごさん也さり よひすばう	あほすとる		ぜぜん	どみごさん平とる なるとあほすとう	さんたていから	さんたまるやの御上 てん	ぜぜん	どみご		さんふらんせつこ
○						○	○					○
聖母マリアの御誕生			祝日 使途バルトロマイの			ベルナルドゥスの祝日	日 殉教者聖テカラの祝	日 聖マリア被昇天の祝				祝日? アッシジのクララの

							八月					
十六日	十三日	十日	九日	八日	三日	二日	大	廿九日	廿八日	廿五日	廿二日	十八日
10/7	10/4	10/1	9/30	9/29	9/24	9/23		9/21	9/20	9/17	9/14	9/10
	さんふらんせす子	どみご		さんみける あるが ん上	どみご	さんぼんじののはつ をさんたていかウ		さんまちよう すところ あほ		どみご んと さんらんべ	さんたまるくろすの あざるたさん	どみご
	○			○		○		○			○	
祝日 マリアのロザリオの	アッシジのフランチェ スコの祝日		ヒエロニムスの祝日	大天使ミカエルの祝日		聖ポンチアヌス教皇 の祝日?		使途マタイの祝日		祝日 聖ランベルト司教の	聖十字架祭の祝日	

							九月					
十五日	十二日	十一日	八日	七日	六日	一日	大	廿七日	廿六日	廿四日	十八日	十七日
11/5	11/2	11/1	10/29	10/28	10/27	10/22		10/18	10/17	10/15	10/9	10/8
どみご	ろい日 もろもろの人のとも	ぜせん びやとの日 もろもろの	どみご	三四ふみたつあほす とろ	ぜせん	どみご やさんとめ さんたまる		じあんのせりした	さんあんてんれ	どみご	九月せつ	どみご 御いたき申さ れたるしめなん
	◎	◎		○		○		○				○
	奉教諸死者の記念日	諸聖人の祝日		使途シモンと使途タ ダイ(ユダ)の祝日	聖女サピナ	マリア、サロメ		聖ルカの祝日				老シメオンの祝日

									十月				
十八日	十三日	十二日	十日	九日	六日	五日	一日	小		廿九日	廿八日	廿二日	十八日
12/8	12/3	12/2	11/30	11/29	11/26	11/25	11/21			11/19	11/18	11/12	11/8
さんたまるやの御せ んさん	どみご	さんふるんせつ子 志 やひる日本さきり志た ん御かいさんの日(前夜)	さんあてんれい あほ すしろ	ぜぜん	どみご さがウべんと	さんたがりな	さんた丸や びるせん			どみご さんばんじ やのはつこは	さん平とろ さんば ふろ	どみご	十月せつ
○		○	○		◎	○	○			○	○		
聖母無原罪のやとり の祝日		フランシスコサビエルの 祝日、またはサビエル日 本キリシタン御開出の日	使途アンデレの祝日		待降節の主日	殉教者アレクサンドリ アのカタリナの祝日	マリア奉獻の記念日			教皇殉教者ポンティ アヌスの祝日	聖ペテロ、聖パウロ 聖堂奉獻の記念日		

									十一月				
十二日	八日	六日	五日	四日	三日	二日	一日	大		廿七日	廿三日	廿日	十八日
12/31	12/27	12/25	12/24	12/23	12/22	12/21	12/20			12/17	12/13	12/10	12/8
どみご	てる日 さん志わん えわんせる志た	御みのなたるせつた (たいや)	どみご さんけれら りよ	ぜぜん	ぜぜん	さんた さんとい あほすとろ	かつた ぜぜん			どみご	さんたまるやのひすば	どみご	十一月せつ
	○	◎	○			○					○		
	使途ヨハネの祝日	クリスマス。キリス ト降誕の祝日	クリスマススイブ	四季の土曜日	四季の金曜日	使途トマスの祝日							

						十二月						
十八日	十七日	十五日	十日	三日	二日	大	廿日	廿六日	十九日	十九日	十八日	十三日
2/5	2/4	2/2	1/28	1/21	1/20		1/18	1/14	1/7	1/7	1/6	1/1
せん さん たあ かた ひる	ど み ご	ひ か と ん さん た ま る や ふ り	ど み ご	ど み ご	ん 志 し ち や ん さん さん も ひ ぜ ぜ		ろ れ た ら き ん た さん 平 と ろ こ	ど み ご	十二 月 せ つ	ど み ご	三 人 の て い を か た	せ く 御 み の 志 る く 志 さん
		○									○	
		聖 母 マ リ ア の き よ め の 祝 日			殉 教 者 セ バ ス テ イ ア ヌ ス の 祝 日		聖 ペ ト ロ が ロ ー マ に 教 座 を 定 め た 記 念 日				公 現 の 祝 日	イ エ ス の 割 礼 の 祝 日

廿四日	廿二日	廿一日	十九日
2/11	2/9	2/8	2/6
ど み ご	さん た あ ほ う す と ろ	せん さん た こ い ん た ひ の	さん た と て や

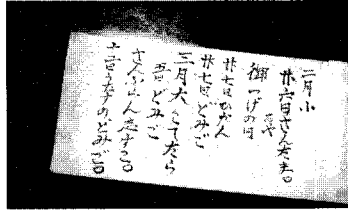


写真 9 日線帳

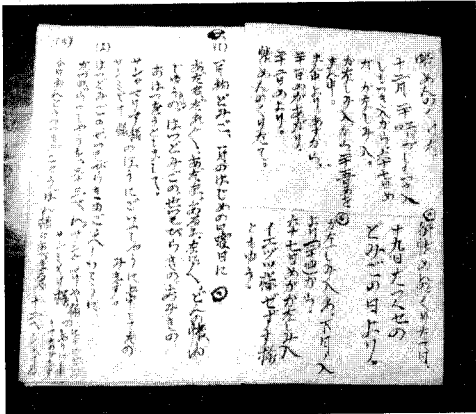


写真 10 日綴りの繰り方見本帳

⑤日繰りの繰り方見本帳

●(表紙) 昭和五十六年七月

大小瀬帳

福江市伊福貴町

昭和五十五年 吉日

御一年内見本帳

大小瀬一同

大小瀬氏

帳めんのくり方

十二月二十三四日がしもつき入

しもつき入から、六十七日めが、かなしみ入。

かなしみ入から、二十五めをまん中

まん中より、あすから。二十一日めがあがり。

二十二日めより。帳めんのくりたて。

◎御帳めんのくりたて日

十九日たつくせのどみごの日より。

◎かなしみ入わ。下月ノ入より(二十四)から。六十七日めがかなしみ入

イエツツ様せず様ともゆう。

一、

(1) 一月初どみご、一月のはじめの日曜日に◎

あだ名だれだれ。あだな。あるま。なになに。どんなの帳内じゆうからの。はつどみごの。せつもびらきのおみきの、おはつをうとしまして。サンタマリア様サンミギリ様のほうにごいつしやうに上申してたのみます。

(2) はつどみごの、七つびらきのごえーいこうに、かづのうらつしやうを。三十三べん。サンタマリヤ様サンミギリ様のほうに、ごいつしやうに上申してたのみます。

(3) 今日のおんとうつつきのごとうばん様にあべまるや十二へんあげる

(4) ただいまの、おはつを、がらすた、一へんでさげ申してたのみます。

一、

(1) 一月五日しもつき入り十三日◎

あだ名だれだれどんの、あるま、なににどんの帳内じゅうからのしもつき入の十三日目のおみきのおはつをうとしまして、サンタマリヤ様オンコ様のほうに、ごいつしやうに上申してたのみます。

(2) しもつき入の十三日めの、ごえいこうに、かずのウ

らっしやうを、三十三べんサンタマリヤ様オンコ様のほうにごいつしやうに上申してたのみます。

(3) こんにち、ごとうばん様に十二へーんあげる。

(4) ただ今のおはつをガラスターペーンでさげる

一、一月十五日は帳内じゅうのきがんの日

(1) あだ名だれだれあるま、あるまなににどんの帳内

じゅうからのなに年度のきがんのたのみかたのみかたのおみきの、おはつをうとしましてヤサカジンジヤシバタサンミギリヤ様のほうにごいつしやうに上申してたのみます。

(2) 帳内じゅうのすいなんかなん、あくびようさいなん

をいっさいのがらせくでございますように、又、今日

さんけい入んの人ものがらせくござるごえいこうに

カズノウラツシヨウヲ三十三べん ヤサカジンジヤ、シバタサンミギリヤ様のほうに上申うしてたのみます。

(3) 今日おんとんつぎのごとうばん様のほうに、アベマ

ルヤ十二へんでごいつしやうに上申してたのみます。

(4) ただいまのおはつを、ガラスターペーンでさげ申して、

たのみます。

一、旧の正月、初どみ◎

おみきをあげる あげかたわ、しんとかわらない。

一、二月二十八日 かなしみ入 ◎ひるからよい◎

(1) あだ名だれだれ、あるまなににどんの帳内じゅうからのかなしみ入の、おみきの、おはつをとしまして、サンタマリヤ様イエズス様のほうにごいつしやうに上申してたのみます。

(2) かなしみ入のごえいこうに、アベマルヤ三十三べ

ン上げる

(3) 今日ごとうばん様に、アベマルヤ十二ヘーン上げる。
る。

こんちりさんを、まい日七かいづつとなえる一しゅうか
んでよい

一、三月二十四日 まん中日◎

(1) あだ名だれだれ、あるまなになにどの帳内じゆの
かなしみ入のまん中のおみきのおはつをうとしまし
て、サンタマリヤ様イエズス様のほうに、ごいつし
やうに上申してたのみます。

(2) かなしみ入のまん中のごえいこうに。アベマルヤ三
十三ベーンごいつしやうに上申してたのみます。

(3) 今日ごとうばん様のアベマルヤ十二ヘーンで上げ
る。

一、四月十四日 かなしみのあがり日◎

かなしみのあがりのごえいこうに、アベマルヤ三十
三ベーンサンタマリヤ様イエツツ様に上げる。

一、六月十四日 マエ祝日◎

(1) 帳内じゆうからのマエ祝いのおみきのおはつをうと
しまして、サガラベントウ様のほうにごいつしやう
に上申してたのみます。

(2) マエ祝いのごえいこうに、アベーマルヤ三十三ベ
ーン上げる。

(3) まえにおなじ

一、六月二十三日 コムギハツモノアげる◎

(1) あだ名だれだれ、あるまなになにどの帳内じゆう
からのちいずの。ごたん上うのお祝の、おみきの、
おはつをにしまして、さんたまりあ様さんじわん様
のほうにごいつしやうに上申してたのみます。

(2) ちいずの、ごたん上うのお祝いのごえいこうに。か
ずのうらつしやうを三十三ベーン上げる。

一、七月九日 せく七人様の祝日◎

サンタリイナ様にあげる

一、八月四日 ゆきの三タマるや様ノ祝日◎

サンタマルヤ様にあげる。

一、八月十五日 盆の先祖の祝日

一、十月三十一日 ごかい三日様の天のはつもの新米ヲ上る

祝日◎

ごかい三日様にあげる。

一、十一月一日、ごせんぎ様に米ノはつ物あげる◎

一、十二月一日 前祝日 サンフランシスコシヤエル様のほ

うに上る◎

一、十二月二十三日 下月ノ入りは。◎

(ヒル) 午前十二時より一時マデニ。

(1) 三タマリア様 コバラケツイタ。オミキノ、オハツ

オカズノウラツシヨウ。三十三ベン

(2) 午後八時ごろ オウチカケ

サンタマリア様ノオウチカケノ。タヤスクオサンナ

サレマスル。タノミノオハツヲトシマシテ。サンタ

エキレンジヤ様サンタイザベリヤ様ノホウに。カズ
ノウラツシヤウヲ三十三ベン。

(3) ヨル十二時

サンタマリヤ様ノ、タヤスクヲサンナサイマシタ。

オヨロコビノ。オミキノ。オハツヲト。シマシテ。

サンタマリヤ様オンコ様ノホウニアゲル。

(4) サンタマリヤ様ガタヤスクヲサンナサレマシタ。オ

ミキノ、オハツヲトシマシテ。サンタエキレンジヤ

様サンタイザベリヤ様ノホウニ上げル。

サンタマリヤ様ガタヤスク。ヲサンナサレタ。ゴオ

ンレイニ、カズノウラツシヨウヲ五十三ベン。サン

タエキレンジヤ様サンタイザベリヤ様ノホウニアゲ

ル。

一、十二月二十四日

一日目^{シヨニチ}のヲミキノヲハツヲウヲアゲル。

サンタマリヤ様オンコ様ノホウニアゲル。

一、十二月二十六日

三日目のラミキノヲハツラウヲアゲル。

サンタマリヤ様オンコ様ノホウニアゲル。

一、十二月三十一日

(1) 八日めのおみきのはつをうをあげる。

サンタマリヤ様オンコ様のほうにあげる。

(2) ごセンゾ様ニモあげる。

(3) (1) 十五日ノキガンヲシテイタ。ごおんれいのふ

りだし。あだな。なにになにどんが帳内じゆうのさく
年きがんにして、おりましたごおんれいのおみきのお
はつをうとしまして、ヤサカジンジャ、シバタサン
ミギリヤ様のほうに上るごきがんのごおんれいにア
ベマルヤ五十三ベン上る。

(2) こんにちおんとんつぎのごとうばん様にかずのうラ

ツしやうを十二ヘーンあげる

(3) ただいまの、おはつをいっしやうに。さげまうし

てたのみます。テンニマシマシ。一ヘーンでよい。

⑥ こんちりさんのオラツシヨ (参考：昭和参拾四年旧正
月吉日 平山氏帳中より)

こんちりさん◎

だいちりよずにたちかえるたてまつる。さいねんら。もを
しあげべくこんちりさんのうらしよの。ことばんし。かない
たもー。はじめ。おわりわ。まし。まさむ。けよすさまのお
んまゑにて。はかりもさん。なんとして。まかれいずれ。く
れき。なきとわいえども。はかりなき。おんじへに。たのみ
をかけ。せわくの。つなに。からめつけられ。ながら。ただ
いまおんまゑにてたてまつれば。さても。おんみわ。はじめ。
おわりなきむへん。こをだいなる。をんなるじに。きやまん
なき。ごぜんろくの。むなもと。さまにて。ましませば。わ
れらにあたえくださる。せわつけ。ごおんな。かつずかずま
ことにさいげんなければ。ばんじに。こいて。ふかくごたい
せつに。むよーさる。ごいこー。ごせんろく。はかりましま
さん。おんみをそもぎたてまつれば。われらにあたえくださ
る。せわつけ。ごをんわ。かずかず。まことに。さいげんな
ければばんじにこえてふかく。ごたいせつに。ぞんじたてま
つれば。べつことこそ。ほんえなり。べくにて。さわなく。

して。かいりて。ざいかの。つみとかを。ゆるしなをも。つくして。そもぎ。たてまつれば。わがみ。なら。いま。しやうしやのこしやへにこうもりたてまつれば。べんにもあらずと。わきまひたてまつるなり。われかして。をかし。しどがなもちんじ。たてまつらず。ただざいかの。はなはだ。をもむき。しかもかすかぎりなき。ことも。はくじようたてまつる。しかつといえど。おんじへに。わがとかよりも。ふかく。おしく。りよさまの。ながしたもう。おんちの。ごきろきより。わがつみわ。なをこをしだいに。ましますと。わきまえたてまつるなり。しかるときに。いかに。おんめ。じきな。むんことはも。ざいねん。わがとが。くやむにおいてわ。なんどきも。ゆるしたも。わんとの。おんやく。そくおいま。おほしめし。いらせ。たまいて。われにざいかを。ゆるしたもう。すきひとか。いま。こころの。そこよりも。ふかく。くやみ。かなしみ。たてまつる。かく。ごんじよいし。たてまつる。ことおなかしご。しようにてわ。おくべす。くけん。おそれの。ことにも。あらずと。ただ。ひとえに。ごたいせつに。よのさるごいこう。ぜんちく。はかりましまさん。おんみを。そもぎ。たてまつれば。しごとをかなしみ。もをすものなり。いまより。わが。しんたい。あらたの。ふ

たたび。もろたび。とがをして。おかしうして。ごない。しようを。たもぎ。たてまつれば。ことある。まじきこと。かたき。おもい。さだめ。たてまつれば。しかればいま。おんあわれの。まなじりようわ。ざいねんなり。われに。めぐらせ。たまえは。わがとかのかわりとして。ごはいしろうのはかりなき。ごきろくを。ささげ。たてまつればこれをもつて。ごかんけいをゆるしたもう。りよをすさまのおんちのごろきとおんめこ。ふかく。おん。あわやめに。たのみをかけ。おかし。ひとかな。おんゆるしを。こいたてまつるものなり。また。この。しやうのおん。とりつぎには。おんははさんた。まるやー。さまに。たのみ。たてまつればそのおんとりやしせうようきこしめし。いりたまいて。われらに。ごかんけーをゆるしたもう。われその。くれきにわ。およばざれども。おんく。いちおんに。ふたたび。めし。くわ。いたまい。つつしんで。たのみ。たてまつる。あんめん。

付録二、古野清人『隠れキリシタン』（一九五九年 至文堂）より「樺島」（二二二頁〜二一九頁）抜書

● 伝承者が激減している現在、樺島において、キリシタン儀礼の詳細を追跡することは困難である。しかし、幸いなことに、古野清人により昭和二十年代後半と思われる時期の調査記録がその著書『隠れキリシタン』に記されている。現在に至るまで、樺島のカクレキリシタンの詳細について、これ以上に明らかにしたものとは存在しないし今後の調査も困難であると思われる。それゆえ、時代差、記述上の問題もあるが、本論および付録資料一を理解するため一助としてその全文を掲載しておきたい。

樺島は人口およそ三、一五〇「開き」を除いて真宗の信徒約七〇%、浄土宗と禅宗が約三〇%である。旧藩時代には富江領で、大蓮寺の門徒衆の共有財産として原野があり、寺院でなく「お座」（宗教的事務を司る場所）を設けて各禮家を統御していた。この他に入植させるには真宗信者であること条件にして原野を分け貸した。これがキリシタンの開き部落の発端である。それで初めは真宗の行事を強制されていた。

明治九年の地租改正により、宗教団体が原野の共有権を村に委ねた。「開き」はある事情のため明治三、四十年頃に真宗から禅宗に転じた。彼らは神道祭としては福江の八幡様または本釜の姫大明神の氏子であり、また病気に罹らないため大師信仰にも入っている。家には神棚あり仏壇あり、荒神様も祀っている。この島のキリシタン家族は多くは外海から初め福江島に入植したものが、さらに転住してきたようである。一九五一年の調査では伊福貴郷（前海・後海）に一二二戸、本釜郷（竹ノ浦・芦ノ浦・田崎）に一二二戸、合計二三四戸と推定されている。伊福貴郷と本釜郷との本村を除いて、全島に散在している開き部落はほとんど全部キリシタンとみなしてよい。伊福貴・焼山・長刀・芦ノ浦・田崎に各々「帳」があり、これらの五帳は帳役・水方（看防）・下役（または取次役）の役職者が揃っている。水方のところに日繰りと死んだとき土産に持たせる「きれ」がある。昔は外道とかエタとか呼ばれて蔑視されたというが、今では差別的な待遇や感情は激減している。この島では先住者を地下というよりも「村」という。「村」は長男相続、「開き」は末男相続とよくいわれているが、これは五島全体にわたってなお詳しい調査を要する。

五つの組の「帳内」は起伏のはげしいこの島のあちこちに所によつては入り乱れて点在しているのが特徴であるが、この傾向は伊福貴の組で最も著しい。毛福貴・野崎・長刀・大瀬・浦ノ浜・オイゴ・隠崎・番岳の集落にわたり、四十一戸で構成されている。

祭儀のため帳内が帳役の家に集まるのは、霜月の入り（御誕生）、御帳開きの正月のはつ寄り、（正月最初の日曜で、「餅噛み」ともいう）。旧正月のおんみでうす様を祀る「ダゴ神」（これは帳役）の神で、水役はサンジュワンサマ。六月の「雪のサンタマリヤさま」。おんみでうすさまが捕らわれようとして六月の土用さなかに大雪が降つて母が連れて逃げたという（長崎県下のキリシタンの間では、雪のサンタマリヤの伝説は色々と変化している）。おんみでうすさまを祀る九月の寄り。悲しみの入り。これははりつけになった日。それから四十六日目に生まれ変わつて神様になった。その悲しみの上がりの日。

集会するのを座するという。御神酒をあげるともいう。アペマリヤで初穂をあげて、下げるときは「天にましまし」、終つて御恩礼として「天にましまし」を唱える。

子供の洗礼は早いほどよいというが、半年ぐらい延はずこ

ともある。アルマの名は男はたとえばサンノ・アリンシ・ドン、女はサンタ・マリヤ・ジョと生まれたときに命名したままで、死んでから変えることはない。抱き親は必ず血縁でなければならぬという。結婚して外に出る者は必ず「帳はずし」をやらねばならない。「家内うち」を外すからと、おんみでうすに頼む。お礼に「数のオラシヨ（アペマリヤ）」を二三回唱える。

結婚は「隠れ」の間でなし、村やカトリックとは通婚しない。離婚をしても差支えない。子供を間引くことは絶対にしてないという。死者は帳役が「触出し」をすませねば扱えない。死人はわが生まれた在所であるローマのサンタエキレンジャの寺へ送りつける。パライソに送るのもある。「クーカイ」（告解）は帳役が行なつてからでなければできない。「死亡届」には「どめごに相果てましたる御死骸願ひ方さま、サンミギリさま、サンパウロさま、アバウストロさま、サンジュワンさま、おん身デウスさま、おん母サンタマリヤさま、みちびきをもつてローマの国のサンタエキレンジャの道におんみしり下さいますように」と唱える。これを「触れ出す」という。入棺のときは「アペマリヤ」、「助かる道」を唱える。お土産は息を引き取つてから、大將どん（帳役）が天を組んだ中か、

着物の襟を持たせてやる。「かけ出し」(かつぎ出し)のオラシヨはアベマリアを唱え、出棺した後、帳役はその家に留まる。墓地への途中ではオラシヨを知っている者が、「みちびき」を唱える。葬式の日取りは、友引きを忌む。

「触出し」などのとき、アルマの名を間違えてあげると死人がサンタエキレンジャに届かない。死届けをして三日目に朝でなくとも初穂をあげる。これを「三日」という。それから七日目毎に四十六日間は初穂をあげる。法事のときは「ケレンド」で、「サルベジナ」は知らない。これらの日に獣など絶対に食べてはいけない。その罪を犯すと行く先に行けない。海で死んで遺体があがらないときは、男女とも藁などで人間の型を作って土産を持たす。

先祖の命日は各家で二十五年、三十三年まで。帳役がでかけて「御神酒の初穂」をあげる。祖先の位牌は兄弟で祀るものもあるが、普通は末子が祀る。命日に帳役が行ってもお礼はなく御馳走をいただくだけである。旧正月には二十日あまり各家を巡る。

病気の場合にも「クーカイ」を行なうが、このときおんみデウスに対し願立てをする。雨乞いの願立てもある。家を新築すれば帳役が「家だまし入れ」、船を新造すれば「船玉様」

といて、主としてサンタカチリナさまであるが、そのほか船についた役人にハツパ・マイイマさま、ドミチ・サントーメ・サガラベントウさまなど五、六人いるのにオラシヨをあげる。

日曜は「悪か日」で、肥に触れたり針仕事をしてはならない。間違いをすれば帳役のところでお神酒をあげて詫びのオラシヨをあげてもらう。オラシヨの種類はすべてで一〇〇以上もあるという。帳内の者は帳役に日曜毎に「良か日」「悪か日」祭日を聴きに行くことになっているが、守らない家が多くなっている。昔の人の半分も覚えて守っていけばよいほうだと役職者は歎いている。樺島の「開き」は全部が半農半漁で、畑は各戸一反から五反ぐらいで、四反持っている家は少ない。

重要な洗礼や葬儀の儀礼については、樺島の各帳で若干の差異がある。田崎の帳内では、子供が生まれて一週間目に名付け祝いを行なった。水役は一週間前から女に触れず身を清め、その朝は抱き親も子供も寒中でも水風呂をあげて清めて出かける。役職者は妻との生き別れはいけないが、役持ちの間には妻が死亡しても持ち続ける。抱き親はたいいてい親戚であるが、近隣の者になってもらうこともある。生きているとき

のドメゴス・ミギリなどのアリマの名は、死ねばサン・ノ・ドメゴス、サン・ノ・ミギリスとかわる。女のマリア・ジョウは死ねばサンタ・マリアとなる。死に瀕して息をひきとるとき、最後のオラシヨを「お土産もの」として帳役が知っている人が耳から吹き込んでやる。死んだ後は、経くずしをしない、線香もたく。屍体は南に向ける（死骸の無いときは「マブリ納め」の空葬式を行なう。人形の「ヤクマイ」を作り、魂を入れて、土産を持たせる）。お帳役が来て、サンタエキレンジャに死届けをすます。これは立派な人であったとして送るのである。死後の天国をあの世、パライソといい、ローマのサンタエキレンジャから行く。死ぬ前には、「クーカイ」を行なう。悪い行ないをし、悪い食物（帳役が何日には肉、卵などを食べていけないと命じている）を食べているから、その浄めのためである。クーカイは生前にも病氣や生き別れのとき、また悲しみの期間中にも行なう。よしてくれと願うコンチリサンを唱える。一座に四九回、これを七回続ける。唱え文句のオラシヨは、とくに死んだ時のエコ（回向）ともいう。悲しみの入り・中・あがりの期間中には「おんごぜんさま」にすまないと、結婚式などの祝いごとはしない。日曜日には畑仕事は休むが、魚取りには出稼ぐ。

芦ノ浦の帳内では、子供が生まれて三日目に帳役・水方・下役が来て、へこ親とともに名付け祝いを行なう。へこ親は男の子は男、女の子は女、誰でもよい。日曜に生まれた子は、男はドメゴス、ドン、女はドメガス、ジョーと名付ける。同じく日曜日に生まれた者をへこ親にしなければならぬ。日曜日以外に生まれた子にはドンやジョーはつかない。死者は帳役が司る。サントメ・アゴーストさまが帳の役前だという。死んだ人の土産として、布切れと「ゴクレキ」とをすこしずつ削り取って持たせてやる。ゴクレキは「クロス柱」ともいい、キリストのはりつけにされた時の木であると伝えている。あの世はパライソ、それまでの道中をフルガトリヤ（fur gatorioの訛り）という。葬式の流儀は伊福貴の帳と同じであるが、死届けのオラシヨは、「ドメゴに相果てました御死骸は、サンミギリさま、サンパブローさま、アボーストロさま、サンジュワンさま、ベアトリーサントーラスさま、導きをもつてローマの国サンタエキレンジャ寺のみうてに御召入れ下さるよう」と唱える。芦ノ浦には悪病災難によくきくという高松神社があり、キリシタンもその氏子である。正月十五日には、お帳役が祭主となり「アベマリヤ」のオラシヨを唱え、手もキリシタン流儀で両手指を組んで祀るとい

う。

長刀の帳内では、「お授け」は生まれて一週間以内朝、鳥の鳴かないうちに行なう。二、三歳になって行なう家もある。抱き親は親戚でも他人でもよい。もとは先方から抱き親にならせてくれと願ってきたし、三人は抱かないといけないといっていた。三人すぎれば五人または七人抱かねばならない。死人でも「アルマの名」はかえず、初めからサン、サンタをつけ、たとえばサンノトーメドンという。抱き親には正月と盆とに餅を一重ね持って行く。抱き親は、男子には生まれた時に着物、四歳に帯、十三歳にへこを贈り、結婚に際しても何か品を贈る。女子には、生まれたとき着物ひとつみ、四歳に帯、十三歳にはお腰、嫁入り時にはそれがしの品を贈る。お授けのときの主役は水方で、水方役はサンジュワンさまの名代である。子供の「連れ人」は抱き親である。今はそうでもないが、元は宗教の違った人と嫁のやりとりはしなかった。結婚すれば女の帳外し、先方では帳入れを帳役が行なった。水の授けのほかはすべて帳役が行なう。お帳役の家で坐ることを「座」という。「祝い」や「悲しみ」に集まったとき、お神酒をあげてオラシヨをとなえるときが座である。この宗教では印度の国の寺、サンタエキレンジャの寺に死届

けの願いをする（死んだとき、真言宗の坊さんを迎える）。その前に「クーカイ」をやつて、悪い事、悪いものを食ったことを懺悔しないと良きところに行けぬという。追善は三日前の朝に行なう。昔は法事などのとき、「村」の人に見られぬよう、戸を閉め切つて行なつたが、今は開放している。それとともに若人の信仰もうすくなり、オラシヨなどを覚えようとしなうことである。

長刀では、何にもでも大きく大師様の信仰が強く、「隠れ」とお大師さんの双方に熱心な人々が多い。正月には真言の人が天照大神や荒神をお祓いに訪れる。